

会社設立・経営を通して実践力・創造力・起業家精神を身に付け、グローバルに活躍するビジネスリーダー育成プログラム

岐阜県立岐阜商業高等学校 田中 英淳

1. 事業の概要

(1) 研究開発課題名

『会社設立・経営を通して実践力・創造力・起業家精神を身に付け、グローバルに活躍するビジネスリーダー育成プログラム』

～Be the CEO Project (「生徒全員が社長」プロジェクト)～

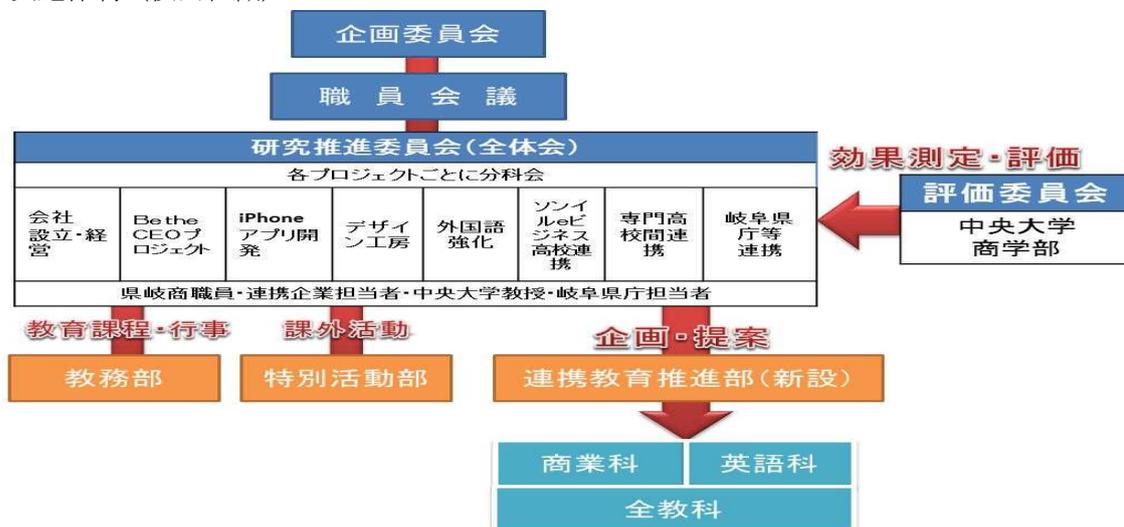
(2) 研究の目的

高等学校における商業教育は、机上での知識・技術の習得に留まらず、生徒が社会に出てから活用できる知識・技術、能力・態度を育成する「実学」として推進を図る必要がある。研究事業を通して、本県のみならず、我が国の次世代の産業界を担う人材育成の視点から、将来の経営者としての素養を涵養し、産業の活性化を図る牽引者としてリーダーシップを発揮するとともに、様々な課題を自らの力で解決しながら生きていく強い意思をもった生徒を育成する。そのために、これまで以上に、地域との連携・交流による実践的教育や外部人材を活用した授業を充実させ、実社会や職業との関わりを通して、高い職業意識や規範意識、コミュニケーション能力等に根ざした実践力と、経営管理能力を養成する。

(3) 目指す生徒像

- ①基礎的・基本的な知識・技術、社会人としての資質を確実に身に付けた上で、ビジネスの知識・技術を実際の経営活動における様々な場面で、主体的に活用する生徒
- ②創造性豊かで斬新な発想を創出する能力と経営管理能力をもつ生徒
- ③自ら学ぶ意欲、自主的に行動する力、課題発見力、課題解決力を持ち、ビジネスを新たに創造する起業家精神をもった生徒
- ④多様な文化や価値観を理解し、ビジネスの諸活動に外国語を活用できる能力をもった生徒
- ⑤将来、国内外において、グローバルビジネスリーダーとして社会貢献するという高い志がある生徒

(4) 実施体制 (校内組織)





Creativity
創造力

Global Mind
グローバルマインド

Practical Skills
主体的な実践力

会社設立・経営をおして実践力・総合力・起業家精神を身につけ、グローバルに活躍するビジネスリーダー育成プログラム



Be the CEO Project

机上だけでは終わらない商業教育を。

Be the CEO Projectは「生徒全員が社長」という意識のもと、学校がひとつの巨大な総合商社「株式会社GIFUSHO」として機能し、その中で学生が自由な発想を武器にビジネスを展開できる仕組みである。産官学の連携による生きた知識を得て、実際に企業経営を実践することで、商業教育の更なる専門性の深化を図る。

株式会社 GIFUSHO



- ◎学生が一定の資金を基に新規ビジネスを起す「Be the CEOプロジェクト」をはじめ、複数の事業を包括した企業体
- ◎学生、教員、PTAにて運営（※会社設立は同窓会、PTAが行う）
- ◎初年度は従来通りの対面販売方式で事業を展開し、次年度以降からはネット販売へシフト

学生が展開する
新規ビジネス



- ◎会社経営
- ◎商品開発・販売
- ◎新規ビジネス発掘

ネット販売の展望



各種商品のネット販売は、学内の「情報処理科」とも密に連携し、東南アジア市場をはじめ、広く世界を見据えていく。

iPhoneアプリ
開発・販売



- ◎自社アプリ開発・販売
- ◎受託開発
- ◎学内の受託開発

デザイン工房



- ◎LOBの広報・販促
- ◎外部からの受託
- ◎学内の受託



現役学生の
公認会計士による
コンサルティング
サポート



ソニーレビジネス
高校（韓国）との
連携



- ◎グローバルなシーンでのビジネスに必要な知識を体系的に学習
- ◎長期休暇時を活用し、ショートステイによる共同授業
- ◎英語を中心とした外国語教育にも注力



2014年1月/日本での交流の様子

県内外の大学、行政機関、民間企業との連携による強力なバックアップ体制

中央大学 商学部とのビジネス教育抱括連携



行動する個性。
中央大学

ビジネス分野全般における包括的連携教育を実施予定。マーケティングや経営学、ビジネスに関する法務など、ビジネスに関する学問的知識を深めていく。

企業との協働による創造力のトレーニング

実習風景と商品化した「熊坂商トリア」



企業と協働での商品開発に参画することで、アイデアを形にする手法やスキームを経験し、市場のニーズに即したアイデアを創造する力を向上させます。

ビジネスプランコンテスト実施

岐阜県商工労働部との連携

商工政策課の主催するイベントに参画をし、企業と共同で作業をし、社会貢献をしながら現場を学ぶ方法を構築。高校生によるアイデアを発表できる場を創出し、スマートフォンアプリの開発を体験できる機会を創出するなど、実社会のニーズとスキルを習得するための場に積極的

農・工・商が連携した
専門高校コラボレーション

農業やデザイン等の他業種の専門高校との協働プロジェクトを実施し、新しいビジネスを創造するための連携力を高める機会を創出。
県内：岐阜工業高校、岐阜農林高校
県外：岐阜県立鳥居原農業高校、佐賀県立有田工業高校

2. 具体的・特徴的な実践研究内容

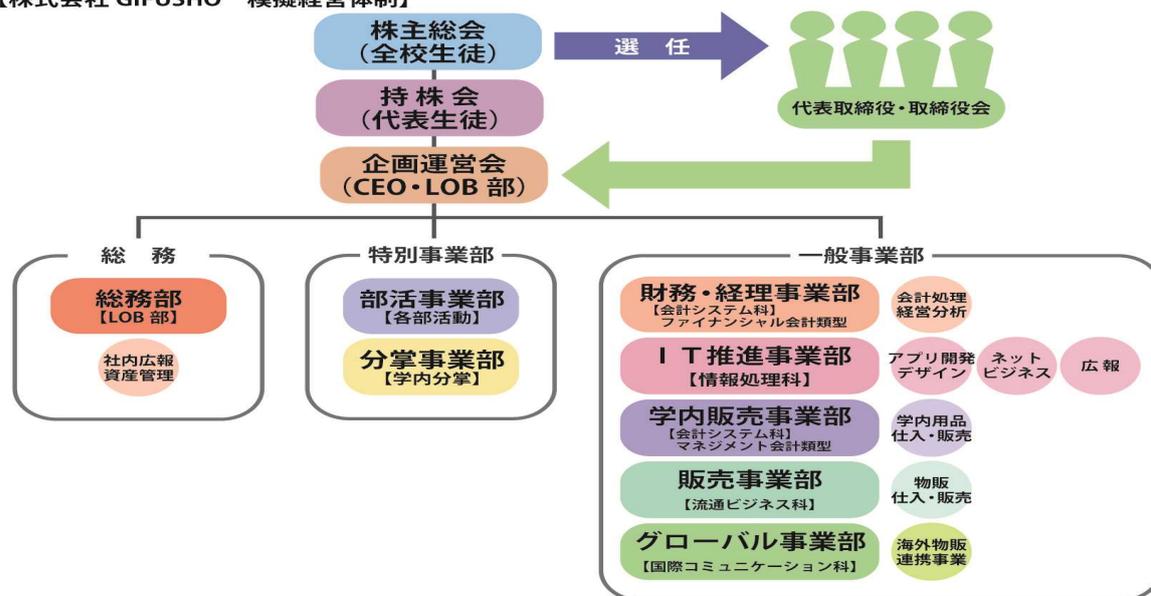
(1) 会社設立に関する指導の工夫改善

本校同窓生やPTA元役員が、生徒の体験的学習の場として、実践的な経営を学ぶ(株)GIFUSHOを設立した。生徒は、設立に必要な書類の作成等について、外部講師を招聘し学習した。なお、本稿においては、会社経営等の体験について、より分かりやすく記述するため、便宜的に、生徒が実際に会社を経営し、種々の事業に従事しているように述べる。

(2) 企業経営等に関する指導の工夫改善

企業経営等を体験的に学習するため、校内に次の模擬経営体制を設け、生徒はその組織で企業経営等について実践的な活動を行う。

【株式会社 GIFUSHO 模擬経営体制】



ア 株主総会

平成28年4月28日の株主総会において、株主総会に関する実践的・体験的な学習を行った。ここでは、役員承認、各事業部長の紹介、事業計画の説明、取締役の紹介を行い、記念すべき第一歩を踏み出した。全校生徒が集まる場において、各事業部の業務報告を行う。

決算株主総会に関する学習は、本年2月の課題研究発表会にあわせて実施する。

イ 持株会

持株会は株主の代表が集まって、意思決定を行う会義として位置付け、各HRから「会社運営委員」を選出する。持株会は、会社運営委員、部活のキャプテン、各事業部長により構成される。持株会では、業務報告、経営方針の検討等を行い、月1回定期的に開催する。

ウ 企画経営会

企画経営会を最高経営会議として位置付け、CEO（最高経営責任者：chief executive officer）等の役員は、LOB部（leader of business 部）部長や部員が務める。2年目以降は生徒会長のように生徒の立候補により選出する。

エ 事業部等

会社の運営は、事業部制を採っている。流通ビジネス科は「販売事業部」、情報処理科は「IT推進事業部」、会計システム科FA類型は「財務経理事業部」、MA類型は「学内販売事業部」、国際コミュニケーション科は「グローバル推進事業部」となる。主に3年生の科目「課題研究」や「総合実践」において活動を行う。この他にも、特別事業部等の組織を設けている。

(7) 販売事業部

1・2年生の科目「マーケティング」や「広告と販売促進」で学習したことを生かし、販売事業部の活動（販売商品の選定、仕入、価格交渉、販売促進活動、販売、検証等を各クラス2回）が、これまで学習した知識・技術の実践的な活動となり、生徒の主体的に問題を解決する

資質や能力の育成につながり、豊かな人間性を育成するとともに、起業家精神、コミュニケーション能力等を伸ばし、地域に根差した産業人の育成を図った。夏季休業中に試験販売を行い、試験販売から得られた問題点を改善し、秋冬販売に挑戦した。

(イ) IT事業部

インターネット上での販路を開拓するために楽天市場に出店した。その際、出店するために必要な手続きを理解するために、すでに楽天市場に出店している企業に依頼し、出店手続きについて学び、(株) 楽天等の協力を得て出店申請を行った。その結果、昨年12月に開店し、オリジナルタオルの販売からスタートした。しかし、発送コスト等をどう抑えるか、どのように楽天市場に集客し、販売するかなどの諸問題を抱えながらのスタートとなった。開店後、すぐに一般の方からの注文があり、幸先の良いスタートを切ることができた。

(ウ) 財務・経理事業部

簿記会計の知識・技術を生かして、財務・経理事業を実施している。「売上・入金処理フロー」及び「仕入・支出処理フロー」を作成し、納品書等の書類を整理し、取引ごとに伝票の起票を行った。財務・経理事業部長が点検した後、会計ソフトに入力し、勘定科目の分類等、処理に困ったことは勝手に判断せず、税理士の指導・助言を受けてから会計処理を行った。月次決算を基本としていることから、月次決算書類を作成し、毎月の持株会で報告を行った。

(エ) グローバル事業部

グローバルパートナーシップ協定を締結したソニールeビジネスハイスクール（以下「ソニール高校」という。）との協働実習を行った。ソニール高校とは、3泊4日の日程で生徒が相互に訪問しており、本校生徒は、ソニール高校で日本の商品を販売するとともに、ソニール高校の商品の販売方法を学んだりしている。今年度から単なる交流だけでなく、商品の輸出入を行うことになったが、商品の発送方法や代金の決済方法、両替など様々な問題があり、半年以上かけて協議し、本年1月から地元大型商業施設にて、韓国からの輸入商品を販売する。

(オ) LOB部

既存の物販を専門としていた「ベンチャーズ部」と調査・研究・発表を専門としていた「マーケティングリサーチ部」を統合し、「LOB部」とした。これまでの活動を総合的に行うとともに、株式会社設立に向けた取組、企業と連携した商品やサービスの開発、国内外の専門高校との連携、会社運営の中核を担う学習をすることを目的に設立した。

これらの事業部等ごとの学習とともに、次の学習も並行して行った。

○ビジネス企画・商品開発アイデア創造授業

アイデア発想法の専門家を講師として招聘してアイデアを創出するための方法を学習し、新商品企画・開発を実施した。1年目は7回にわたって実施、2年目には4回実施、3年目には希望者を募り2回実施した。このアイデア創出法を活用して新商品企画・開発が行われる機会も増えた。また、全校で応募する日本政策金融公庫主催「高校生ビジネスプラングランプリ」等も活用している。

○デザイン工房

販売促進のための広告、商品パッケージデザインの企画及び制作を手掛けることを目的とした「デザイン工房」を部内に立ち上げ活動を開始した。販売活動で展示するポスターやPOP広告等の制作ができるようになるとともに、外部からの制作依頼も受けるようになった。県からの委託を受けて、授産施設で製造された商品の販売促進を行っている企業や社会福祉協議会と連携し、販売会のポスター制作も行った。

○利益の獲得・売上を伸ばすための研究と実践

近隣の大型商業施設と本校の間で連携協定を締結し、定期的な販売実習と販売促進を兼ねた活動を紹介するイベントを開始した。

○株式会社の企画と経営

株主総会を運営し、各執行役員の承認及び会社の様々な経営施策の方向性を示すとともに、

模擬経営校内体制における執行役員、事業部長を選任し学校全体での会社運営の学習が始まった。毎月の持株会を実施するとともに、社内報（毎月発行）により、全生徒に周知を図った。また、社訓、社是、経営理念を決定した。

(3) 学習評価の工夫改善

株式会社経営の体験活動を通して生徒の多様な能力評価を行うために、連携先である中央大学商学部から御指導をいただき、評価項目を作成し、評価を行った。

当研究では、生徒に育成する能力として、「コミュニケーション力」、「問題解決力」、「知識獲得力」、「組織的行動能力」、「創造力」、「自己表現力」、「多様性創発力」の7分野、31項目を設定し、各項目ごとにレベル0からレベル4で段階分けした評価基準を設けた。

○ルーブリックによる生徒の多様な能力評価（一部抜粋）

「コミュニケーション力」

	定義	レベル4	レベル3	レベル2	レベル1	レベル0
傾聴力	他人の意見を聞き、正しく理解し、尊重する	相手の意見を十分理解し、自分と異なる意見にも耳を傾け尊重している	相手の意見を十分理解し、自分と異なる意見にも耳を傾けている	相手の意見を十分理解している	相手の意見を一通り理解している	意見を聞き、理解することができていない
読解力	記述された内容を正しく理解する	記述された内容、記述されていない内容を含めて真意を十分理解している	記述された内容を十分理解した上で、記述されていない内容があることを考慮し、真意をある程度理解している	記述された内容を十分理解している	記述された内容を理解しようとしている	記述された内容を理解できていない
記述力	正しい文章で他人が理解できるように記述する	正しい文章で、他人が十分理解できる記述となるよう秀でた工夫をしている	正しい文章で、他人が十分理解できる記述となるよう工夫をしている	正しい文章で、他人が十分理解できるよう記述することができる	正しい文章で、他人が一通り理解できるよう記述することができる	記述された文章を他人が理解できない、あるいは、記述された文章に重大な誤りがある
提案力	適切な手順・手段を用いてわかりやすく説明したうえで、自分の意見を効果的に伝える	適切な手順・手段を用いてわかりやすく説明したうえで、自分の意見を効果的に伝え、自分と異なる意見を持つ相手からも十分な理解を得ている	適切な手順・手段を用いてわかりやすく説明したうえで、自分の意見を効果的に伝えている	効果的な手順・手段を用いてわかりやすく説明できている	効果的な手順・手段を用いてわかりやすく説明しようとしている	効果的な手順・手段を用いてわかりやすく説明できない
議論力	議論の目標を設定し、それに合わせて議論を展開する	議論の目標を設定し、それに合わせて、自分と異なる意見を持つ相手とも議論を展開し相互理解を得ている	議論の目標を設定し、それに合わせて、自分と異なる意見を持つ相手とも議論を展開している	議論の目標を設定し、それに合わせて議論を展開している	議論の目標を設定し、それに合わせて議論を展開しようとしている	一方的な主張に終わっている。あるいは意見を述べていない、誤った意見のために議論にならない

3. 成果と今後の課題

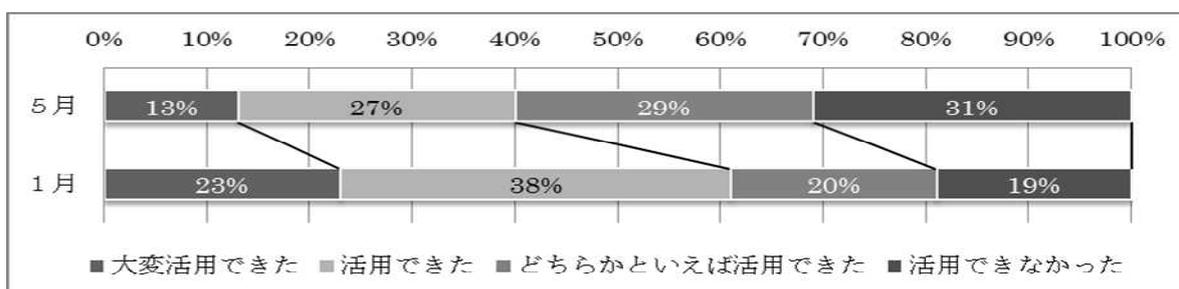
(1) 成果

生徒の意識の変化について調査したところ、次のとおりとなった。これらのことや日頃の生徒の様子から、模擬的な体験実習ながら、会社の設立過程や経営活動に生徒が主体的に参画することにより、商業に関する専門性の深化を図ることができたと考えている。また、地域における企業と協働でビジネス活動を展開することにより、実際のビジネス活動の厳しさ、利益を上げる困難さ、消費者ニーズを的確に把握するマーケティングの実証性と検証の必要性、コスト意識など、会社経営を肌で感じることができ、商業で学習した知識・技術を総合的に活用することで学習意欲を高め、自ら学ぶ意欲を向上させることができた。更には、将来、地元において起業をしたり、地元企業に就職し地域経済の発展に貢献したりしようとする意識も高まった。

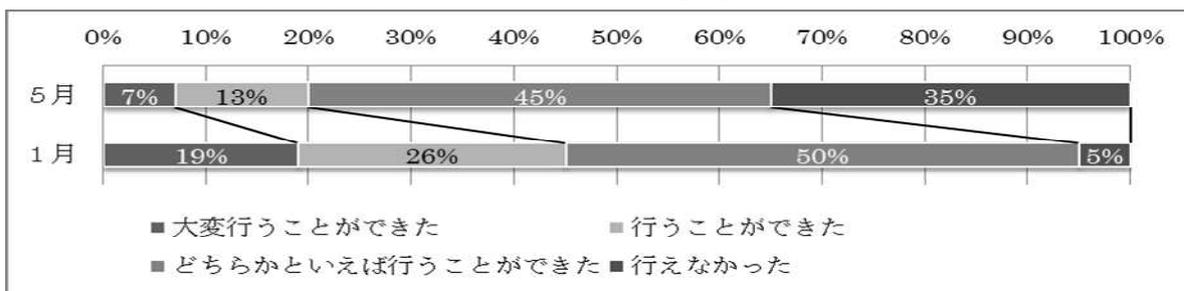
このように、実社会における企業の経営活動を生徒が主体的に体験することにより、経営管理能力を養うとともに、学校で習得したビジネスの知識・技術の更なる深化を図り、また地域社会の貢献に寄与しようとする態度を育成することができた。

○生徒の意識調査

商業で学んだ知識・技術を経営活動に活用することができましたか。（現3年生対象）

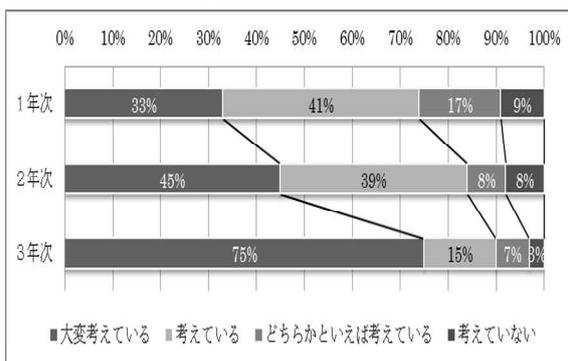


自ら課題を発見し、経営活動を行うことができましたか。(現3年生対象)

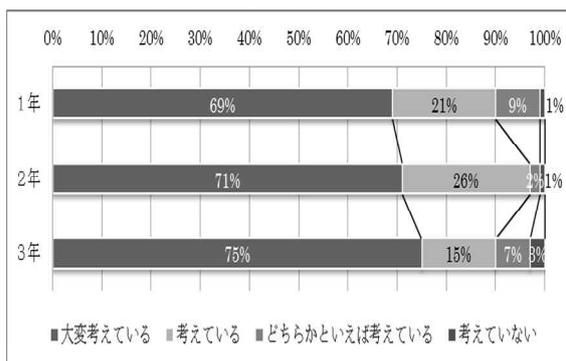


あなたは、将来、地域経済の発展に貢献したいと考えていますか。

(現3年生対象)



(全校生徒対象)



(2) 今後の課題

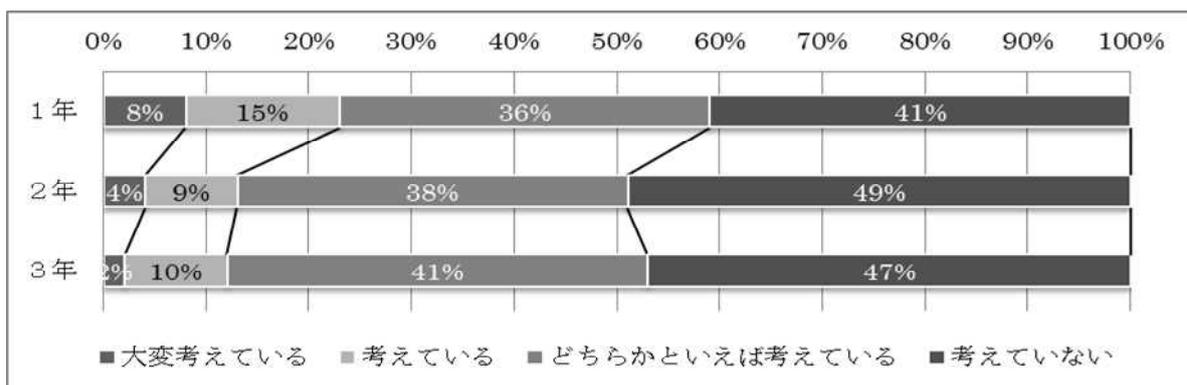
当研究の育成したい生徒像の中に、「多様な文化や価値観を理解し、ビジネスの諸活動に外国語を活用できる能力」、「将来、国内外において、グローバルビジネスリーダーとして社会貢献するという高い志がある生徒」をあげている。3年間の研究においては、国内の活動に留まり、次の生徒の意識調査にも表れているとおり、グローバルな視点で地方創生を担える人材の育成には至っていない。

そのため、本年2月に地元(株)十六銀行と「地方創生を担う人材の育成に関する協定」を締結予定である。この連携協定は、(株)十六銀行と本校が緊密に連携し、互いの人的資源を活用し、岐阜県の地域経済の発展を図ることを目的としているものである。この連携では、海外関連セミナーへの参加や留学生との異文化交流会の開催が企画されている。当研究で培った連携を更に発展させ、国際的な広い視野をもって積極的に国際社会と関わり、地方創生に資する人材育成を進めていきたい。

本研究での株式会社経営については、実践的・体験的な学習活動の一環として実施しているものであり、株式会社経営の学習の進め方等については研究の途上であり、引き続き研究が必要である。

○生徒の意識調査

あなたは、将来、グローバルに活躍したいと考えていますか。



5年一貫教育の特徴を生かした、看護専門職者を育成するための先進的なプログラムの研究開発 ～「豊かな人間性」「確かな知識・技術」「科学的思考・判断力」と「生涯学び続ける力」を育てるために～

埼玉県立常盤高等学校 教諭 守屋 有紀
教頭 有賀 弘一

1. 事業の概要

「専門職」と呼ばれる職業人にとって『実践能力』と『研究能力』は、必須の能力であるにとらえられている。高度化する医療に対応しうる看護実践能力と研究能力を備えた人材を育成することは、「看護専門職者」を養成する本校の使命である。本研究では、看護専門職者に求められる力は、新たな医療技術の進歩や社会の変化に柔軟に対応するために必要な「生涯学び続ける力」であるとの仮説を立て、様々な取組を行っている。「生涯学び続ける力」は、その要素である広い視野に立った看護観を育てることを目指した「豊かな人間性」、臨床に即した看護実践能力を育てることを目指した「確かな知識・技術」、看護の探求、研究的態度を養うことを目指した「科学的な思考・判断力」における各取組で身につけた力を基盤とし統合することで、新たな課題を発見し自ら解決する力になるものと考えている。本研究での取組を通して「生涯学び続ける力」を身につけ、社会の第一線で活躍できる専門的職業人を育成することを目的としている。そのために、これまでの教育活動を見直すとともに、これらの力が身につくようなプログラム開発を行うことに重点を置いてきた。

今年度は、3年目としてこれまでの実績をもとに、シラバスの中に位置づけた各取組がこれまでの教育活動を深化させることを目指した。また、それぞれの取組において鈴木敏恵氏による「プロジェクト学習で身につく力」30項目¹⁾を参考にして「育てたい力」を設定し(表1)、評価を行ってきたが、生涯学び続ける専門職者を育てる取組を相対的に評価する指標として、新たに「SPHで身につく力～実習ループリック～」を作成した。

表1 SPHにおける取組

	豊かな人間性	確かな知識・技術	科学的思考・判断力	生涯学び続ける力
育(評価の視点)	<ul style="list-style-type: none"> 社会への参画力 事態への対応力 礼節 共有する力 時代の事象を見る力 情報の取捨選択力 自己決定力 状況判断力 	<ul style="list-style-type: none"> 情報活用能力 学年に応じた看護技術・知識 臨地のイメージ力 	<ul style="list-style-type: none"> 論理的思考 科学的視点 文献検索力 クリティカルシンキング 	<ul style="list-style-type: none"> イメージする力 課題発見力 課題解決力 コミュニケーション力 プレゼンテーション力
取組	<ol style="list-style-type: none"> 地域活動体験 夏休みボランティア活動体験 復興支援ボランティア・スタディツアー <ol style="list-style-type: none"> 看護観を育てる取組 倫理に関する特別授業 花を育てる取組 	<ol style="list-style-type: none"> e-ラーニングによる授業 学年に応じた看護実践能力の客観的評価法の開発 専門家による特別講座 「放射線特別講座」 「認定看護師特別講座(がん看護、呼吸器アセスメント、災害看護)」 	<ol style="list-style-type: none"> 実験的要素を含んだ学習体験 看護研究方法の系統的な指導 文献検索、クリティーク 看護研究計画書 看護研究計画書 大学との連携による専門性の高い学習 「大学連携講座(栄養学、薬理学、基礎看護)」 	<ol style="list-style-type: none"> プロジェクト学習 避難所・環境整備プロジェクト 看護技術のエビデンスを確かめるプロジェクト ヘルスプロジェクト 他 ポートフォリオの活用 キャリアポートフォリオ

「豊かな人間性」では、「夏休み地域活動体験」として、コミュニケーション力を養うこと、異年齢との交流を通して、礼節を学ぶことや、相手の立場に立って考える豊かな人間性を養うことを目指した。活動としては、ボランティア活動や、社会資源のリサーチなど地域における活動を行っている。また、専攻科で先行的に実施した「ライフステージからみた生命倫理に関する授業」では、各領域で行われている生命倫理に関する授業の進め方を統一した。授業のスタイルを倫理的ジレンマを感じる様な事例を提示し、一人一人が考える時間を持った後に、グループで意見交換を行うという共通の形にした。

「確かな知識・技術」では、ICTを活用した授業や協調学習、シミュレーションの手法を用いたアクティブラーニングによる授業を多く行い、生徒が積極的に授業に参加し、意見交換する様子がみられた。また、教材として、看護技術に関する本校独自の映像を作成し、タブレットやスマートフォンでの視聴を可能にし、生徒の主

体的な学習に活用した。新たな取組として、生徒が看護技術の習得とその成長を自ら確認するツールとなるように学年毎に看護技術の到達度を設定し、実技コンテストや実技テストを通じて技術の定着を図った。

「科学的な思考・判断力」では、実験的要素を含んだ授業を展開し、文献検索の方法や、基礎的なデータ処理、初歩的な看護研究の指導を行ってきた。論文を読むことで、研究的な視点や態度の育成を図っている。

本校の研究の仮説として「生涯学び続ける力」は各々の生徒が持つ「豊かな人間性」「確かな知識・技術」「科学的思考・判断力」を統合する力と捉えている。本校では、「生涯学び続ける力」を育成するために「プロジェクト学習」を取り入れ、このプロジェクト学習を通して自ら課題を発見し、その解決方法を導き出し、それを他者に伝えるという一連の思考活動を繰り返し行うことで身につく力が、「生涯学び続ける力」につながると考えている（図1）。

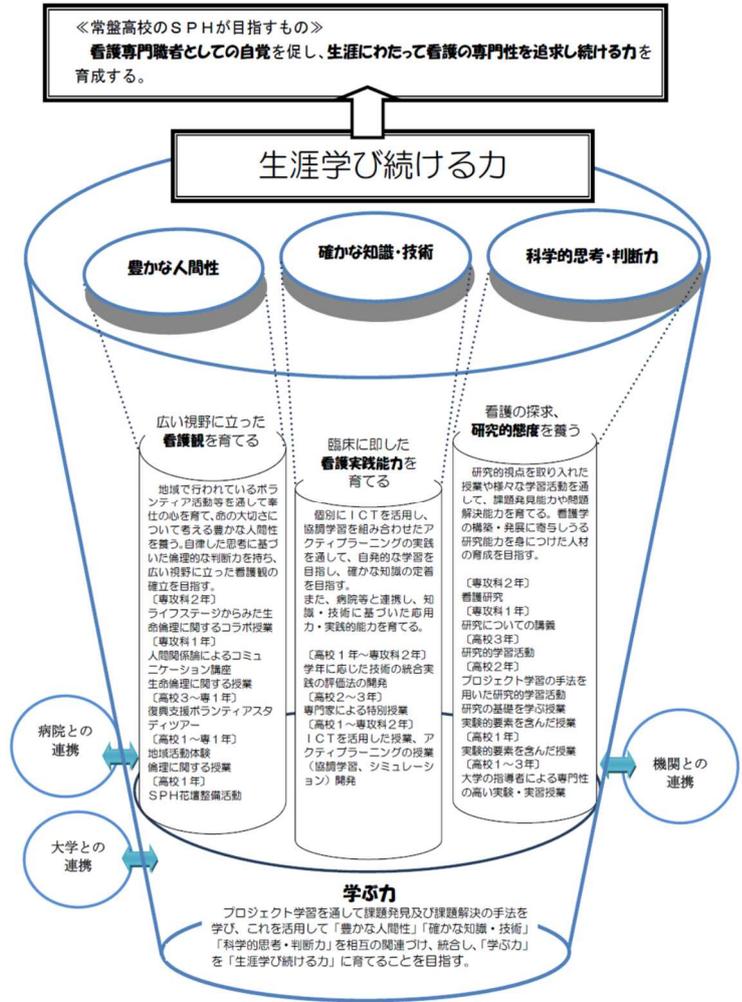


図1 研究のイメージ図

2. 具体的・特徴的な実践内容

様々な取組の中から3つの主な取組について報告する。

(1) 「豊かな人間性」を育てる取組～復興支援ボランティア・スタディツアー～

SPHの指定時より「地域活動体験」の一環として、夏休みに4日間の「復興支援ボランティア・スタディツアー」を行っている。連携協定のある「聖学院大学」、「聖学院高校」と本校の合同企画として8月5日（金）～8日（月）の4日間、岩手県釜石市、宮城県気仙沼市を訪問した。今年度は、対象をこれまでの高校3年生、専攻科1年生に加えて高校2年生までとし参加を募集したところ、常盤高校からは高校2年生7名、高校3年生7名、専攻科1年生3名の合計17名の参加者が集まった。「常盤ならではのボランティア活動を提案するプロジェクト」の3年目の活動は「自分で感じる（1年目）」→「考えを深める（2年目）」に引き続き、「みんなに広げる」を目標とした。聖学院大学の大学生によるプロジェクトリーダー会議に企画の段階から参加し、釜石の方々のニーズを把握し、それに合わせて常盤高校生が自分たちにできることを考え、子どもとの遊びイベントにおいて4つの企画を実施することができた。訪問の後には、活動から学んだことや、「防災意識を高めたい」という生徒

ツアーを通して私たちが考えた事

今回のツアーを通して現地に行くことでしか知ることの出来ないさまざまなことを学びました。3.11を風化させないためにも東北で起きた出来事をみんなに知ってもらい、興味を持ち残ってほしいと思いました。そして、今回のツアーを通して学んだことの中から、「みんなに広げる」ことの一つとして津波でんでんこで逃げる大切さを伝えたいと思います。でんでんこは東北地方の方で、「各自」「めんめん」という意味があり、津波でんでんこは防犯避難として解釈すると、それぞれ「津波が来たら、取る物も取り敢えず、肉親も構わずに、各自でんでんばらばらに一人で高台へと逃げろ」「自分の命は自分で守れ」になります。今回の震災でも子供を心配して逃げ遅れた大人が多いために比べて、この教訓を基に避難訓練をしてきた岩手県釜石市内の小中学校では生存率99.8%という奇跡的な成果を挙げました。このことから、防災教育の大切さがよくわかりました。

私達からの提案！！

- ①避難場所・避難経路の確認
- ②家族内で集まる避難場所の確認

これらをしっかりと確認しておくことで、災害があったときに家族と連絡が取れなくても、お互いに無事であることを信じて、一人一人がまずは自分の身を守ることを考えあわずに非難してください。

図2 生徒がボランティア・スタディツアーの後に提案したこと

からの提案をまとめた報告書を作成し、校内のみならず地域での報告を行った（図2）。

図3、4は、ボランティア・スタディツアーの報告を聞いた高校1年生から3年生に実施したアンケートの回答である。90%以上の生徒がツアーの報告を聞いて、被災地への理解が深まり、機会があれば行ってみたいと考えていることが分かった。また、被災地への関心を持っており、機会があれば何かしたいと考えている生徒も多いという結果から、このツアーの3年目の目標である「みんなに広げる」は、達成したと考える。

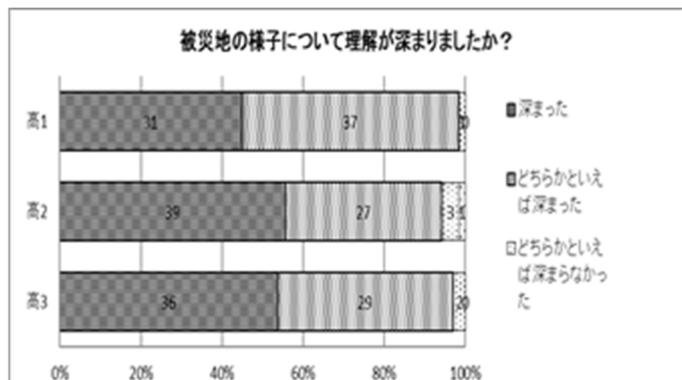


図3 報告を聞いた生徒のアンケート結果①

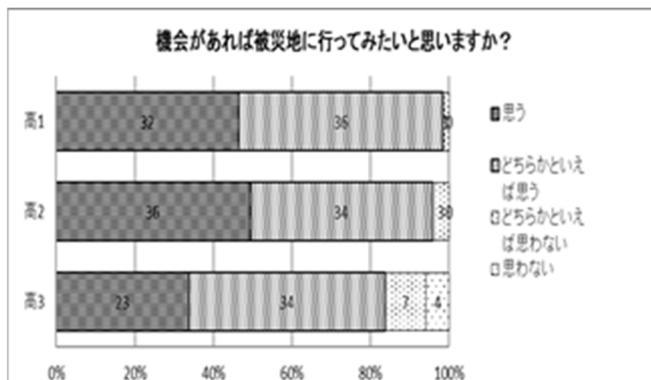


図4 報告を聞いた生徒のアンケート結果②

これに関連し、ボランティア・スタディツアーで宮城県を訪れた成果を活かし、少しでも多くの生徒に被災地を訪れる経験をさせるために、今年度は、専攻科1年生が宿泊研修で宮城県仙台市に行った。閑上地区、荒浜地区で語り部より体験談を聞き、石巻赤十字病院の看護師より「病院における災害看護の実際」についての講義を受けるなどの経験をした。生徒の感想には、「知らないことが多かった」「実際に行ってみないとわからないことがある」との声が多く聞かれた。今年度は1泊2日であり、移動に要する時間も長く十分な研修の時間が取れなかったが、実際に現地を訪れることにより得られる学びが多いことから、次年度より専攻科1年生の宿泊研修として宮城県に行き、2泊3日で実施する予定である。

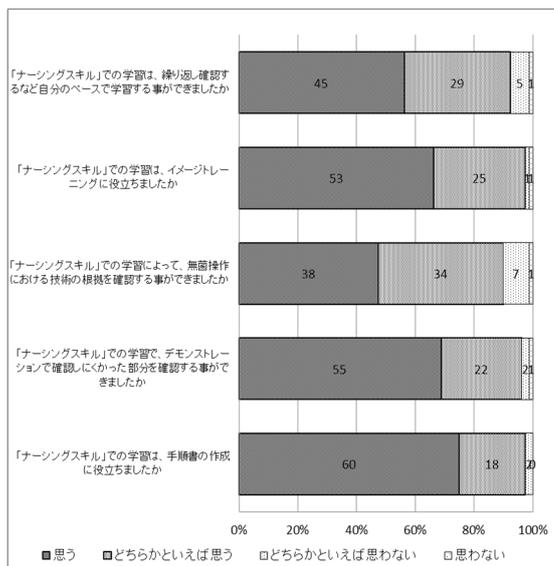
(2)「確かな知識・技術」を育てる取組～ICTを活用したアクティブラーニング～

看護のデジタルコンテンツ「ナースングスキル」による予習を前提とした授業を展開し、自ら根拠を考えて学習する習慣をつけさせることを目指した。導入当初からの課題であったデジタルコンテンツの内容と本校の授業内容との違いによる生徒のとまどいについては、デジタルコンテンツの動画を差し替えた。具体的には、「基礎看護技術」の7つの単元（表2）において動画や静止画を独自に作成し、既成のコンテンツを本校の授業や教科書に合わせた内容に改編し、本校用にカスタマイズすることで解消した。動画を作成する上で工夫したことは、教えたいポイントを生徒がイメージしやすいように見える化を意識して撮影し、思考を深め根拠を考えながら手順書が作成できるようにした。生徒が事前に動画を視聴し演習に臨む事で演習にかかる時間が短縮し、授業時間を有効に使えるなどの効果があった。また、これらを活用することで、生徒が自分のペースで予習や復習を行え

表2 本校独自のデジタルコンテンツ

学年	項目	内容・活用方法
1年生	ベッドメイキング（動画）	ベッドメイキングの一連の流れ（1人で作成・2人で作成）、下シーツの角の作成のポイント等を撮影した。授業中や自宅で視聴し、自主練習に役立てる。
2年生	血圧測定（動画）（静止画）	血圧測定の一連の流れ・減圧方法のポイント・コロトコフ音等を撮影した。
	無菌操作（動画）	授業のデモンストレーションと同様の内容を撮影した。生徒は校内演習前に、動画を視聴し手順書等の作成をし、演習に臨む。
	病床環境の調整・安全を守る技術（動画）（静止画）	授業で提示した事例のベッド環境を静止画と動画で撮影した。生徒は自宅等でそれを視聴し、事前課題を行った上で、授業に参加する。
	一時的導尿（動画）（静止画）	授業のデモンストレーションと同様の内容を動画で撮影した。患者の準備、無菌操作での物品準備、消毒方法、カテーテルの挿入方法のポイントなどを、校内演習で使用する物品を用いて動画、静止画で提示した。生徒は校内演習前に視聴し、手順書等の作成をし、演習に臨む。
	注射（動画）	授業のデモンストレーションと同様の内容。テキストで不足している部分や細かい手技などを強調し、演習前の手順書作成や実技のイメージ化をさせ、演習に臨む。
3年生	点滴施行中患者の寝衣交換（動画）	生徒が、点滴施行中患者の寝衣交換について手順書を作成し、その方法をグループワークを行い練習した。その後、教員のデモンストレーションを一例として動画で撮影した。動画には「技術の到達度」に基づき、考えて欲しいポイントをテロップで提示した。

るようになったことがアンケートの結果（図5、表3）からみえてきた。タブレットを用いた活動では、生徒がお互いに実際の様子を撮影し、自身の技術を振り返り技術の向上に役立てたり、グループワークの資料の検索ツールとして活用した後に授業に参加するなど、反転学習の取組も始めた。また、ICTを活用した協調学習や反転学習、シミュレーション教育など、アクティブラーニングによる新たな指導法を取り入れるために、教員間で情報を共有しながらスキルアップを図った。具体的成果として、お互いにアドバイスをし合いながら教材研究を進めたり、他の教員の授業を見学に行くことで、学年や領域を超えた情報交換の機会が増加した。その結果、新たな教材を開発でき、これまでの学習法との置き換えや関連づけについて検討するなど、教育内容が充実した。カスタマイズした動画を用いた授業を多く実施した、高校2年生に対して行ったアンケートの結果、「技術の向上に役立ったか」では97.4%、「知識の向上に役立ったか」では96.2%と肯定的に回答していた。自由記述では、61.5%の生徒が「イメージ力」と記述した。これらより、動画を活用することにより「イメージ力」が付き知識と技術が向上したと考えられる。



上に役立ったか」では97.4%、「知識の向上に役立ったか」では96.2%と肯定的に回答していた。自由記述では、61.5%の生徒が「イメージ力」と記述した。これらより、動画を活用することにより「イメージ力」が付き知識と技術が向上したと考えられる。

表3 カスタマイズしたデジタルコンテンツによる反転学習後のアンケート結果

手順書作りに役立った(27)	動画で見ると想像が付きやすいので手順書が書きやすい
	手順書を書く時に、実際の無菌法の方法をイメージして書くことができた デモでは確認しきれなかったところを見れたので、詳しく手順書を書けた
細かく見ることができた(19)	細かく見えにくい物品の配置や、受け渡しがわかりやすかった デモではメモを取りながら聞いているので、聞きのがした所を確認できた
	細かい動作までしっかりと把握できて実習しやすかった
自分のペースで繰り返し見ることができた(18)	自分が重点的に見たい所を、自由に巻き戻せたりして本番に役立った デモでは気づかなかった所を、繰り返し見ること気づくことができた
	他の人にじゃまされずに分からない動作を一つ一つ確認することができた
演習の時にスムーズにできた(16)	授業とリンクさせながらの学習ができて、今までより実習がやりやすかった 授業と同じ動画が見れたので、困惑することがなかった
	清潔部分と滅菌部分の区別がよく理解でき、演習の時に気を付ける事ができた

図5 カスタマイズした動画のアンケート結果

(3)「生涯学び続ける力」を育てる取組～自ら学び、課題解決力を身につけるプロジェクト学習～

本校では、全学年がプロジェクト学習に取り組んでいる。今回は、その中から高校1年生と専攻科1年生の取組を報告する。

高校1年生は4月～12月にチームプロジェクトとして、「避難所・環境整備プロジェクト」を行った。災害時に学校の体育館が避難所となったことを想定し、そこに集まった人達が「その人」にとって最適に一晚を乗り切る方法を提案するというものである。生徒たちは、避難所に集まる人を「リアル」に想定し、「その人」の日ごろの生活状況や避難所での困りごとを考えた。この学習活動は、「基礎看護」に位置づけ、基礎看護の学習と並行してプロジェクトを進められるよう工夫した。「日常生活と看護」に関する講義の後に、生徒が想定した「その人」はどのような状況にあるのかを考えさせる時間を取りプロジェクトを進めたことで、学習内容の理解の深まりと「その人」のイメージ化を図ることができた。

専攻科1年生では、「疾患を抱えていても"その人"らしく働き続けてほしい」という願いのもとに、「自らの健康をコントロールし改善する方法」を提案するプロジェクトを行った。ここでも対象をリアルに想定し「その人」が、疾患を抱えていても自分らしく働き続けるために必要な社会資源を考え提案した。夏休みには実際に「その人」が住むと想定した地域に、リサーチに行き、有用な社会資源を考える機会をもった。専攻科1年生では、人を理解しかかわろうとする人間性や、これまで学んできた知識・技術を活用して、「その人」にとってよりよい方法を考え判断する力が求められるプロジェクトであった。



2つのプロジェクトのプレゼンテーションは合同で実施し、地域の方や、病院関係者、保護者に公開した。また、高校3年生がプレゼンテーションの運営にあたった。3つの学年が関わる異学年交流の形式として企画したこの公開プレゼンテーションを通じて「次の学年では自分たちが行う」という目指す姿が見え、生徒のモチベーションが向上したと考える。プロジェクト学習をツールとして生徒たちが主体的に取り組むための様々な活動が作り出されている。

3. 成果と今後の課題

(1) SPHの取組による生徒の変容

SPH全体の取組による生徒の変容を評価するための客観的な指標として、全体の鈴木敏恵氏による「プロジェクト学習で身につく力」30項目¹⁾を「育てたい力(評価の視点)」として評価を行っている。また、生徒自身がその成長を自ら確認するための指標として、「育てたい力」をもとに、臨地実習の場面における姿(ありたい像)として目標を設定し、「SPHで身につく力～実習ルーブリック～」を作成した。

a. 「育てたい力」の経年変化

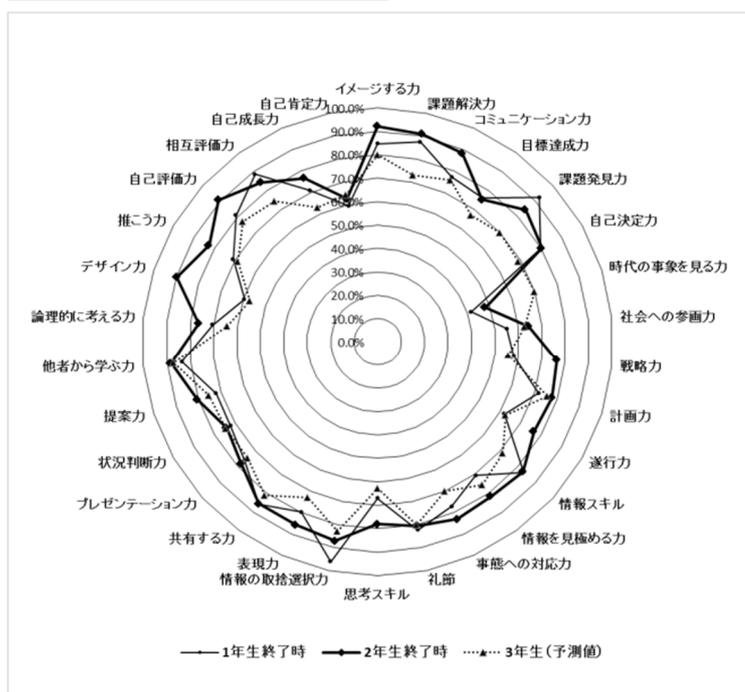


図6 SPH指定時の入学生の経年変化

各学年の終了時に30項目からなる「育てたい力(評価の視点)」アンケートを実施している。「それぞれの力が身についたと思うか」という問いに対し、4段階で回答を得ている。図6は、SPH指定時の入学生が「身についた」と感じている割合の経年変化をみたものである。全体を見ると、1年生の時よりも2年生の円が大きくなっており、2年次の方が力が「身についた」と感じている生徒の割合が多いことがわかる。この結果は、先行学年でも過去2年間同様の動きをしている。高校3年生(予測値)では、円が小さくなっていることから、高校1年生に比べ高校2年生は自分の成長を実感できているが、高校3年生は、専攻科への進級前ということもあり、より客観的に自分を振り返った結果、自己評価が厳しくなると考えられる。また、SPHにより、自分で考え思考を深め

ることを求める専門的な取組を早期に行うため、与えられる課題の難易度が上がっていることも、影響しているのではないだろうか。しかし、教員の手応えとして、生徒たちは自分のビジョンやありたい像を自分の言葉で表現し、目標を設定した上で、主体的に取り組むことができるようになったと感じている。これらを定性的に評価する方法として、次に示すルーブリックを作成した。

b. SPHで身につく力～実習ルーブリック～の作成

SPHの取組全体による生徒の変化を評価する指標として、生涯学び続ける「看護専門職者」を目指す生徒が専攻科修了までに目標とする姿を、「臨地実習における行動」として具体的に示したルーブリックを作成した。高校3年生終了時に5段階中の「3」、専攻科2年生終了時に「5」を目指すものとし、各学年の実習終了時の姿を比較しその変容を評価することとした。ルーブリックの項目は、上記の「育てたい力」と、昨年度の職員研修の結果からまとめられた「常盤高校が考える豊かな人間性」をもとに、「社会人基礎力²⁾」を参考にして独自の指標として作成した。項目は20からなり、生徒が自己の成長や行動変容を臨地実習における到達度として、

客観的に適切に評価できるようにするため、5段階評価とし、各段階の評価基準を具体的な観点で示した。その妥当性を検証するため、臨地実習をすべて終了した現専攻科2年生に実施し、その結果をもとに到達度や表現を修正した。今後は、高校3年生の実習終了後（2月実施予定）に実施するが、評価は、自己と他者（引率教員）で行い、その後に生徒と引率教員が面談をし、実習における自己の行動を客観的に振り返るとともに、身についた力の確認や今後の課題について確認していく。

生徒は SPH による活動一つ一つを積み重ね「生涯学び続ける力」を身につけていく。このルーブリックを作成したことで、本校が求める看護専門職者として必要な力を具現化でき、SPH 活動でどのような力を身につけてほしいのかという「教員の願い」を共有することができた。ルーブリックのそれぞれの項目は、SPH 活動における「育てたい力」と関連しており、活動の目標を臨地実習での行動で明示したことは3年間の取組の集大成であり、今後、5年間の目標を評価するための指標ができたと考えている。

(2) シラバスに記載したSPHの取組

3年目の今年度は、これまで行ってきた様々な取組の中から、学習効果の高い活動について、授業時間内で継続的な教育活動を実施できるようシラバスに明記した（表4）。

表4 シラバスに記載したSPHの取組

	豊かな人間性	確かな知識・技術	科学的思考・判断力	生涯学び続ける力			
高校1年	「地域活動体験」夏休みの課題として実施	基礎看護	デジタルコンテンツを用いた授業	基礎看護	大学連携講座(県立大学)	基礎看護	防災プロジェクト
			シミュレーション学習、協調学習		実験的な取組		ナインゲールプロジェクト
			実技コンテスト				
高校2年		基礎看護	デジタルコンテンツを用いた授業	基礎看護	プロジェクト学習(NAP)	基礎看護	ナーシング・アート・プロジェクト
			シミュレーション学習、協調学習	栄養	大学連携講座(女子栄養大)		
			実技コンテスト	情報活用	初歩的な統計処理		
			専門家による特別講座(放射線、感染管理)				
高校3年		基礎看護	デジタルコンテンツを用いた授業	基礎看護	看護研究講座	精神保健	夢をかなえようプロジェクト
			シミュレーション学習	薬理	大学連携講座(日本薬科大)	基礎看護	合同プレゼンテーションの企画運営
			実技テスト				
			専門家による特別講座(フィアス、災害看護)				
		成人看護	専門家による特別講座(放射線、がん看護)				
専攻科1年	各領域 倫理に関する授業 看護観を育てる授業	統合	実技テスト	統合	看護研究		ヘルスプロモーション
							ヘルスプロジェクト
			ICT活用、シミュレーションなどによるアクティブラーニングを実践中				
専攻科2年	各領域 倫理に関する授業			看護研究	看護研究		

新たに追加された学習活動は、プロジェクト学習やシミュレーション学習などのアクティブラーニングや、主体的な学習活動を支援するICTを活用した授業形態が目立つ。授業を効率的に実施するために、反転学習も取り入れている。また、大学との連携講座や専門家による特別講義も定着してきた。これらは外部講師や大学での授業と校内の授業の関連付けや、実験等で得たデータの活用など、既存の授業とのつながりを意識させることにより、生徒に深い学びを促していると考えられる。また、シラバスに明記し、必須の教育活動としたことでさらに多くの教員のスキルアップを図ることができた。

(参考文献)

- 1) 鈴木敏恵：21世紀を生きる力が身につく！総合的な学習・プロジェクト学習ポートフォリオシート集、教育同人社
- 2) 箕浦とき子・高橋 恵編：看護職としての社会人基礎力の育て方、日本看護協会出版、2012
- 3) 鈴木敏恵：アクティブラーニングをこえた看護教育を実現する—与えられた学びから意志ある学びへ、医学書院、2016

H28 SPH活動概要

5年一貫教育の特徴を生かした、看護専門職者を育成するための先進的なプログラムの研究開発 ～「豊かな人間性」「確かな知識・技術」「科学的思考・判断力」と「生涯学び続ける力」を育てるために～

	「豊かな人間性」を育てる取組			「確かな知識・技術」を育てる取組			「科学的思考・判断力」を育てる取組			「生涯学び続ける力」を育てる取組	
	夏休み地域活動体験 (復興支援ボランティアスタ ディツアー)	看護観を育てる取組 (倫理に関する授業)	人間関係論	デジタルコンテンツを 用いたe-ラーニング による授業	学年に応じた技術の 統合実践の評価法の 開発	専門家による特別講 座	実験的要素を含んだ 学習体験	看護研究方法	大学との連携による 専門性の高い学習	ポートフォリオの活用	プロジェクト学習
高校1年	地域で行われている活動を知る。年代の異なる人とのかかわりの中で相手を思いやる心や奉仕の心を育てる。自分の経験を他者に伝えることができる。	花壇づくりを通して、協力、責任感、連携など人との関係やチームの一員としての立場を考えた行動をとることができる。看護専門職者として常に自覚と責任をもって行動する態度の基礎を養う。		基礎看護の予習復習にナーシングスキルを活用し、基礎的な知識・技術を身につけることができる。タブレットを利用して看護技術を振り返ることができる。	基礎看護における「看護技術コンテスト」にチームで取り組む。日常生活援助技術を身につける。		看護に関連した学びを通して、科学的根拠(エビデンス)の大切さがわかる。		「基礎看護」に関連した専門性の高い講座を受講し、専門知識を得るとともに、実験手法やデータ収集の実際を経験する。 ※大学連携講座「基礎看護(埼玉県立大学)」	パーソナルポートフォリオを作成し、自分が力を入れて取り組んだことを可視化することで、自己肯定感を向上する。	プロジェクト学習の手法を身につける。 「コミュニケーション力」、「プレゼンテーション力」を身につける。 ・常盤高校生に役立つ防災マニュアルを提案します！ ・大切な人の健康を守る方法を提案します！
高校2年	地域での活動体験を通して、他者を尊重する事の大切さや、自分の果たせる役割について考えることができる。看護での学びを活かした活動について考えることができる。	日々の学校生活や各教科における授業を通して、看護専門職者として常に自覚と責任をもって行動する態度の基礎を養う。		基礎看護の予習復習にナーシングスキルを活用するとともに、臨地実習時に患者のケアに役立てることができる。タブレットを利用して看護技術を振り返ることができる。	基礎看護における「看護技術コンテスト」にチームで取り組む。臨地実習で求められる基礎的な看護技術の定着を計る。	臨地実習のイメージが付き、不安を軽減できる。認定看護師等の授業を通して、患者が療養生活を送る中で、医療事故の発生を回避するための知識・技術をイメージすることができる。併せて生徒自身の危険性を予測し、感染や放射線曝露から身を守ることができる。 ※特別講座「放射線防衛」「感染管理」	授業を通して感じた「疑問」を出発点にして、看護に関連した実験的要素を含んだ学習経験を通して、看護技術の根拠を確かめる。	文献検索の方法がわかり、CiNii等を利用して、初歩的な文献検索ができる。初歩的なデータ処理ができる。	「栄養」に関連した専門性の高い実験・実習講座を受講し、専門知識を得るとともに、実験手法やデータ収集の実際について理解を深める。 ※大学連携講座「栄養(女子栄養大学)」	パーソナルポートフォリオの作成	疑問に思ったことを明らかにするために、自ら課題を発見し、先を想像し、具体的に予測を立てることで課題を解決しようとする力を身につける。 ・エビデンスに基づいた看護技術を提案します！
高校3年	看護での学びを生かした地域活動体験を行う。周囲の状況を判断し、その場に合わせた行動をとることができる。	日々の学校生活や各教科における授業を通して、看護専門職者として常に自覚と責任をもって行動する態度の基礎を養う。		基礎看護の予習復習にナーシングスキルを活用する。また、臨地実習を通して、受け持ち患者の状況に応じた援助を考えることができる。タブレットを利用して看護技術を振り返ることができる。	基礎看護における「看護技術コンテスト」に個人で取り組む。臨地実習で求められる応用的な看護技術の定着を計る。	専門家による講座を受け、これまでの知識を関連づけ臨地(病院・災害時)をイメージするとともに、専攻科での専門家による授業への準備を進める。 ※特別講座「放射線治療」「がん看護」「フィジカルアセスメント(聴診法)」	高校2年生での経験を発展させ、「研究の問い」を意識したテーマを設定して、実験的要素を含んだ学習を体験する。	設定したテーマにそって文献検索やクリティークを経験する。研究計画書の作成を経験する。	「薬理」に関連した専門性の高い実験・実習講座を受講し、専門知識を得るとともに、実験手法やデータ収集の実際について理解を深める。 ※大学連携講座「薬理(日本薬科大学)」	パーソナルポートフォリオをキャリアポートフォリオにして継続させ、看護、医療に関する新聞・雑誌などの記事や書籍のリスト等を資料化し、自分が目指す看護像について意識啓発を図る。	発見した課題に対し、適切な解決方法を提案する力を身につける。 ・臨地実習に関するプロジェクト
専攻科1年	看護での学びを生かした地域活動体験を行い、経験を通して、自分なりの看護観を持つ。	人生各期において生命倫理における課題や問題点があることを理解する。 ※大学連携講座「聖学院大学」	信頼関係を構築するためのコミュニケーションに関する基礎的な知識と技術を習得させる。 ※特別講座「対人関係」	シミュレーション教育等により、多重課題の状況に応じた患者をイメージし、課題を発見し、最善の解決方法や手技を考えることができる。	「技術の統合Ⅰ」で患者を想定した事例に合わせた実技試験を実施する。		文献検索を十分に行い、「食後の血糖上昇実験」を通して、得られたデータを分析することができる。	研究論文を読んで、クリティークの視点にそって考えることができる。文献検索を行い、事例研究を進めることができる。基本的な統計処理ができる。		キャリアポートフォリオの作成	看護の専門職者を目指すものとして、自ら発見した課題に対し、適切な解決方法を提案する力を身につける。 ・成人期の疾病予防、健康増進に向けたアイデアを提案します！
専攻科2年		臨地実習において、これまでに身につけた、倫理観や看護観に基づいた看護を実践する。	精神面を充実し、看護の職業に従事する者として、人間関係を円滑に保つためのコミュニケーションを実践する。	シミュレーション教育等により、多重課題の状況に応じた患者をイメージし、課題を手技を考え、実施し評価することができる。	「技術の統合Ⅱ」で多重課題の場面を想定した実技試験を実施する。		看護研究	研究計画書に基づいて本格的に看護研究に取組み、論文としてまとめ、発表することができる。		キャリアポートフォリオの作成	倫理に関するプロジェクト看護の専門職者を目指すものとして、自ら発見した課題に対し、適切な解決方法を提案する力を身につける。 ・倫理に関するプロジェクト
育てたい力 (評価の視点)	・社会への参画力 ・事態への対応力 ・礼節 ・共有する力	・時代の事象を見る力 ・情報の取捨選択力 ・自己決定力 ・状況判断力	・定性評価のみ	・情報活用能力	・新たな目標値、評価法を学年ごとに設定する。	・臨地のイメージ力 ・知識力	・生徒の自己評価 ・情報を見極める力・思考スキル・論理的に考える力 ・教員による客観的評価 科学的視点・文献検索する力・データ処理する力・クリティークする力	・評価の対象としない	・イメージする力 ・課題発見力 ・課題解決力 ・コミュニケーション力 ・プレゼンテーション力		
具体的な活動	・事前事後のグループワーク ・報告書の作成、文化祭での展示 ・復興支援ボランティアスタディツアー「常盤ならではの活動を考えるプロジェクト」	・各領域でのコラボ授業 授業方法の検討等	・コミュニケーション力を自己評価するものを考える	・ICTを活用した授業の実践 ・協調学習、シミュレーション教育 ・ナーシングスキルの活用 ・指導案の蓄積	・各学年で実施している実技評価を年次ごとの目標を設定し、系統立てていく。	・専門家による特別授業と、校内の授業を関連付けていく	授業を通して感じた「疑問」を出発点にして、研究的視点で事象をとらえられるよう導く【教員チームの活動内容】(看護研究ゼミナール) ・実証研究に関する指導時間の確保	初歩的な文献検索から始め、学年進行とともに研究的態度を養ってゆく【教員チームの活動内容】 ・研究指導方法の見直し ・統計学・生化学等の外部講師との連携 ・看護研究ゼミナールの運営 ・実証研究の評価基準の検討	大学と連携した専門性の高い学習経験をさせることで、科学的手法についての理解を深めさせる【教員チームの活動内容】 ・大学連携講座の設定・実施 ・大学との連携推進	・パーソナルポートフォリオ、キャリアポートフォリオを継続して作成するように支援する	・学年ごとのプロジェクト学習だけでなく、各活動、授業の単元などでも実践していく。

	SPHで身につけた力	ありたい像	5	4	3	2	1
豊かな人間性 (常盤高校が考える豊かな人間性)	他者を尊重する	人の話をよく聞きその内容をもとに他者を尊重し、他者に配慮し、倫理にもとづいた行動ができる。	他者の意図を汲み取ろうと自分の聞く態度に配慮して他者が話しやすい雰囲気を作り、他者を尊重して善い方に向けた行動ができる。	話の内容を確認しながら話を聞き、他者が意図していることを汲み取り、善い方法を考えることができる。	相槌を打ちながら他者の話を素直に聞き入れることができる。	他者の話を聞くことができるが、自分の意見を優先しがちである。	他者の思いに目を向けることができていない。
	協調性	場の状況をよみ自分の役割を理解し、その役割を果たすことができる	チームの中で、リーダーシップを発揮することができる。場に合わせた「ほうれんそう」やカンファレンスでの積極的な発言ができる。	チームの中でメンバーシップを果たすことができる。場に合わせた行動ができる。	場に合わせた行動ができる。チームメンバーへの配慮がある。	他のメンバーへの配慮が少ない。場に合わせた行動も乏しい。	他のメンバーへの配慮がない。場に合わせた「ほうれんそう」がなく、カンファレンスでの発言も少ない。
	自己理解 折れない心 高い志	粘り強くあきらめずに取り組むことができる	自分の思いと異なる事象が発生した際に、それを解決するための方策を考え、実践することができる。	自分の思いと異なる事象が発生した際に、それを解決するための方策を考えることができる。	自分の思いと異なる事象があっても前向きに取り組むことができる	自分の思いと異なる事象に向き合おうとする。感情のコントロールができない。	自分の思いと異なる事象に対して向き合わず、あきらめてしまう。感情のコントロールができない。
	感性が豊か 協調性	他者の立場に立って、思いを汲み取り優しく思いやりのある行動ができる	柔軟性をもって患者の思いを汲み取り、行動計画、実施に反映させ最適なケアを実践することができる。	患者の思いを汲み取りケアを考え、行動計画に反映させ実践することができる。	患者の思いに気づくことができる。行動計画に反映させることができる。	患者の思いに気づくことができるが、それに対応するための行動に至らない。	患者の思いに気づくことができない。
	社会人の基本スキル	社会の一員として良識を持ち、規範を守り、責任のある行動をとることができる。	常に、時間管理ができる。TPOに応じた挨拶ができる。礼儀正しく規律を守ることができる。他の生徒の模範となる行動ができる。	常に、時間管理ができる。TPOを考えた挨拶ができる。礼儀正しく規律を守ることができる。	自分からあいさつができる。時間を守る。提出物の期限を守る等の約束事を守る事ができる。	助言を受けて、時間を守り、提出物の期限を守る事ができる。また、自分からあいさつすることができる。	助言を受けても時間が守れず、提出物の期限も守られない。また、自分からあいさつすることができない。
確かな知識・技術	臨地のイメージ力	援助においてプロセスや成果をイメージし、実施できる。	対象の状況を十分にイメージし、手順書を作成し、最も適した方法で実施できる。かつ、患者に起こりうる危険を予測し、回避する行動がとれる。	対象の状況をイメージし、個別性を反映した手順書は作成し、実施できる。かつ起こりうる危険性を予測している。	対象の状況をイメージし、個別性を反映した手順書は作成し、実施できるが、起こりうる危険性を十分に予測できていない。	対象の状況をイメージし、標準的な手順書を作成し、実施している。	標準的な手順書を作成し、実施している。
	知識・技術力	既習の知識が定着し、またさらに知識を得ようと自発的に意欲的に学習できる。	既習内容が定着している。かつ自発的な学習を通して獲得した知識を活用している。	既習内容がほぼ定着しており、助言により新たな知識を獲得している。	助言をもとに必要な知識を意欲的に獲得している。	助言をもとに必要な最低限の知識を獲得している。	知識が不足し、学習意欲も感じられない。
		必要な看護技術を習得し、安全・安楽に実施できる。	対象の生活背景や個性に合わせて、優先順位を考えたうえで、原理原則に基づいた援助が安全・安楽に実施できる。	対象の個性に合わせて、原理原則に基づいた援助が安全・安楽に実施できる。	環境を整え、原理原則に基づいた援助が安全・安楽に実施できる。	原理原則に基づいた援助が安全に・安楽に実施できる。	原理原則に基づいた援助が（安全に・安楽に）実施できない。
	情報活用能力	必要な情報を最適な方法で収集し、分析や判断に活かすことができる。	必要な情報を、情報の特性を理解した上で効果的・効率的に収集している。かつ情報内容を吟味し、取捨選択し、意図的な情報収集し、分析や判断に活用している。	必要な情報を効率的に意図的に収集し、分析や判断に活用している。	助言をもとに必要な情報を効率的に意図的に収集し、分析に活用している。	助言をもとに、必要な情報を限られた手段で収集している。	助言があっても情報を収集することができず、指示された資料や内容のみまともめられる。
科学的思考判断	論理的に考える力	専門知識を最大限活用して現象を的確にとらえ、論理的に考えて判断することができる。かつ、適切な表現で記録することができる。	対象の個別の状況を的確にとらえ、看護の必要性について、専門職者として個性を考慮して的確に判断することができる。	対象の状況をある程度的確にとらえ、看護の必要性について、個性を考慮して判断することができる。	対象の状況の概要をとらえ、看護の必要性について、判断することができる。	対象の概要はある程度とらえてはいるが、看護の必要性を考慮することができない、または、考えてはいるが適切な判断とは言えない。	対象の概要をとらえられず、看護の必要性に気付けない。
	科学的視点(思考スキル)	看護実践において科学的根拠や有効性・妥当性を考え、対象にとって最適な看護の方法を考えることができる。	看護実践において科学的根拠や有効性・妥当性を考え、個性を考慮して最適な看護の方法を考えることができる。	看護方法を実践するにあたって、個性を考慮し、科学的根拠とその有効性・妥当性について検討している。	看護を実践するにあたって、根拠と、その有効性について考えることができる。	標準的な看護を実施するとき、根拠を自分なりに考えることができる。	標準的な看護を実施する理由について、考えることができない。あるいは、実施すべき看護を考えることができない。
	文献検索力(情報を見極める力)	臨地実習を通して感じた疑問から、研究課題を見出し、文献検討して、研究疑問を精練することができる。	臨地実習を通して感じた疑問から、先行研究を検索し、研究につなげることができる。	臨地実習を通して感じた疑問から、課題を見出し、先行研究を検索することができる。	実習を通して何らかの疑問を感じ、看護に関する情報を集めている。	実習を通して感じた疑問はあるが、看護に関する情報の収集には至らない。	実習での経験に客観的な疑問を感じるがない。
	クリティカルシンキング(論理的に考える力)	クリティカルな視点で看護実践を振り返り、効果と妥当性を評価・考察し、次の実践に向けて新たな検討ができる。	対象の反応から看護実践の効果と妥当性を考え、客観的に評価・考察するとともに、次の実践に向けて新たな検討ができる。	自分の看護実践の効果と妥当性を考え、客観的に評価することができる。	自分の看護実践を振り返り、その効果と妥当性について考えることができる。	自分の看護実践について、の反応などから効果を振り返ることができる。	自分の看護実践の振り返りの必要性を感じない。
生涯学び続ける力(3つを統合して得る力)	イメージする力	自分がこれからすることを具体的に思い浮かべ、先を予測できる。	自分がやるべきことは何かを見極め、自ら取り組むことができる。	自分のありたい像をイメージし、行動するヒントを自ら探すことができる。	周囲からアドバイスにより、期待されている自分の役割を把握して行動することができる。	自分のありたい像をイメージできるが、どう行動したらよいか、わからない。	自分のありたい像をイメージできない。
	課題発見力	自分の現状を見て問題点を見いだせる。	自分を客観的に評価することにより、課題を発見し、解決策を見つげることができる。	課題を明らかにするために、他者の意見を積極的に求め、分析できる。	現状を正しく認識するために、情報収集することができる。	自分の現状に問題があると気づいている。	自分には問題がないと考えている。課題を発見しようとする意欲がない。
	課題解決力	目の前の状況を見て自分の問題を発見し、知恵を出して解決・実行できる。	目標達成に向けて粘り強く、困難な状況から逃げずに挑戦できる。更にその計画を俯瞰し、進捗状況や不測の事態に合わせて柔軟に行動を修正できる。	目標達成に向けて、不測の事態が起きた場合にも、取り組み続けることができる。	予定したことについては計画通り実践できる。他者のアドバイスにより、不測の事態には対応できる。	課題を解決する意欲はあるが、行動に移せない。	課題を解決する意欲がない。困難な状況に立ち向かう気持ちが弱い。
	コミュニケーション力	自分の考えや気持ちを相手と交換できる。	自分の考えを具体的なかつ論理的にわかりやすく伝えられる。同時に、自分の意見を持ちながら、相手の背景や事情を考慮して共感をもって受け入れられる。	自分のことをある程度伝えられ、かつ、相手の事情を理解しようとする態度はみられる。	自分のことを伝える表現力は乏しいが、相手のことを聴こうとする態度はみられる。	自分のことを伝える意欲はあるが表現が乏しく、相手の気持ちも理解することができない。	自分のことを伝えようとする意欲がない。
	プレゼンテーション力	自分の伝えたいことを表現し、相手を納得させることができる。	効果的な手段を活用することで、相手を納得させる、周囲の人を動かす、行動変容させることができる。	効果的に相手に働きかけ、相手の同意を得ることができる。	未熟ながらも自分の伝えたいことが伝わり、相手に理解してもらえる。	自分の伝えたいことを表現し、相手を動かそうとするが、手段が未熟で伝わらない。	相手を動かす意欲がない。

cool Japan cool Bansyuori —播州織再発見と西脇産ブランド発信—

兵庫県立西脇高等学校 主幹教諭 藤原容子

1 事業の概要

(1) 本校の概要

本校のある西脇市は、兵庫県のほぼ中央、北播磨地方に位置し、先に糸を染めて織りあげる先染め織物「播州織」の産地である。普通科7クラス（H28年度より6クラス）、生活情報科1クラスの全日制高校で、創立77年の伝統ある進学校である。平成9年に家政科から生活情報科に学科改編し、情報教育と地場産業「播州織」を取り入れた服飾デザインによる教育を特色としている。地域と連携し、播州織を使った様々な活動に取り組んでいる。

(2) 研究の目的

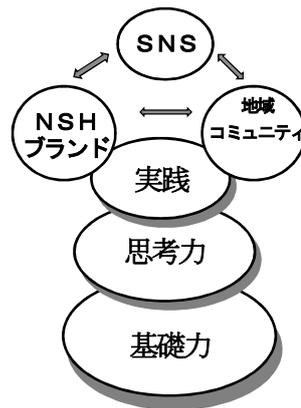
- ア 播州織産地としての、伝統ある織物や昔ながらの職人技を再発見し、世界に誇れる技術や日本の文化、織物の文化を理解するとともに、企業で使用されている織組織制作コンピュータシステムを導入し、播州織生産の最先端技術を身に付けた将来の播州織のスペシャリストを育成する。
- イ 消費者のニーズを考え、播州織製品のプランニングやデザイン、リサーチの他、マーケティングやプロデュースをする力を身に付けた地域産業を担う将来のスペシャリストを育成することを通して、地域産業を活かした新たな「家庭に関する専門学科」の在り方を研究する。
- ウ 播州織のすばらしさとともに、NSHブランド（西脇高校生活情報科ブランド）として、高校生の感性を活かして、地域で学んだ播州織技術と日本文化や西脇の文化を秘めたオリジナルブランドを世界に発信する。
- エ 播州織でつながる町づくりのすばらしさを再認識し、「播州織で織りなす町」を西脇高校から情報発信し、コミュニティづくりの一端を担う。

(3) 研究概要

上記の研究目的を達成するために、1年目は、「基礎力」の習得を中心に研究を行った。「基礎力」となる5つの力（播州織の知識・デザイン力・製作技術・言語能力・日本文化の理解）を身に付けさせるための取組を進めた。

2年目は、「思考力」の習得を中心に研究を行った。「思考力」を付けるための(1)マーケティングと商品開発 (2)織物文化の伝承 (3)新・播州織の提案 (4)情報発信 に取り組んだ。1年生では、日本の文化の理解から cool Japan を考察し、2年生では、これまでに学んだ知識や技術を統合してグループで共通理解を図りながらブランド企画を実践し、3年生では、「デザイン思考」の「ビジョン→共感→問題提起（課題）→創造（結論）→試作（行動計画）→検証」というプロセスを理解して実践していく中で、柔軟な発想力や想像力、課題解決能力や協調性、責任感を養うことができた。

本年度は、「実践力」の習得を中心に取組を進めるため、Made in Japan や cool Japan を意識して、海外に向けたものづくりや西脇高校オリジナルブランドを提案し、播州織の海外発信を目指した。また、播州織のテキスタイルデザインに限らず、様々な場面で、「デザイン思考」を取り入れ、ニーズや課題を分析しながら、播州織を通じた地域の活性化やコミュニティづくりに取り組んだ。



2 具体的・特徴的な実践内容

(1) 「基礎力」の養成

ア 播州織の知識

1年目は全員で播州織工場見学を行い、製造工程を理解した。2年目は、地域の撚糸工場・織布工場などに分かれて見学し、それぞれがレポートにまとめ発表することで情報の共有を図った。さらに3年目は、全員が一連の流れを見学し、夏休みに各自が地域の工場の見学を行いレポートにまとめ、プレゼンテーションを行った。また、夏休みにインターンシップを行い、播州織に対する思い、丁寧な仕事や職人のこだわりなどを通して、地域への誇りを感じることができた。

イ デザイン力

刺繍やスモッキングなどの応用作品は、できるだけ自由な発想でデザインを考えるように工夫した。また、家庭クラブ活動として行っている播州織プロジェクトでの小物づくりなどにおいて、新しいアイデアやデザインを考える機会を設けている。地域からの協力もあり、デザイナーの講演や研修にも積極的に参加している。

ウ 製作技術

Can do リストを作成し、生徒の到達目標を明確にしながらか指導の定着を図ることができた。また、指導方法を検討し、原型からのパターンを展開を導入し、レベルアップに取り組むことができた。

エ 言語能力

実習や講義、イベントに参加した際には、毎回レポートを提出し、各自のポートフォリオを作成した。また、情報関係の授業内容を工夫し、コラムを取り入れるなど、読書や発表の機会の工夫を行った。

オ 日本文化の理解

1年「日本の文化と地域産業」では、茶道や華道、自然や日本の文化や美しさを追究し、レポートやプレゼンテーションにまとめて発表することで、その理解を深めた。

(2)「思考力」の定着

ア マーケティングと商品開発

播州織を軸に、地元商店街のイベント等を企画する「きらら商店街の活性化プロジェクト」や西脇市で活躍するフラダンスチームの衣装製作等を企画する「フラ・プロジェクト」、『地元の駅を日本一に』を考える「西脇市駅プロジェクト」、西脇産金ゴマの活性化を考える「第二次金ゴマ革命」など、学習した「デザイン思考」の手法を用いて、地域活性化を目指し取り組んだ。

イ 織物文化の伝承

綿の栽培から、糸紡ぎ、草木染めや手織りを行うことで織物の原点から理解し、また手仕事を通して創造性を育むことができた。

ウ オリジナル播州織の提案

京都研修：京都の歴史や景色、日本の文化や自然の美しさを再認識し感性を磨く。京都の自然や文化から感じた「美しいもの」をレポートし、何がどのように美しいのかを、言葉やイメージで表現することで、日本の美しさとはばらしさの理解を深めた。

東京研修：ファッション業界のものづくりの世界を理解し、日本の最先端技術やアパレル産業を知ることにより、地場産業「播州織」の魅力を見直した。

パリ研修：パリで行われた世界最大の素材見本市「プルミエール・ヴィジョン」の見学を通して、グローバルな視点から播州織を捉える。Made in Japan や cool Japan について、日本の文化や美意識を見直し、日本人の感性を意識した作品づくりに生かした。

NSHブランドの提案：2年生40人が、今までの研修で学んだ知識や感性をもとに、“My favorite style”をテーマにして、画像処理ソフトの技術を用いて、各自イメージマップを制作した。これらを4つにグルーピングし、各々、シンプルでかっこいい系の「Stylish girl」、ビンテージをキーワードにした「レトロ」、少し大人っぽくかわいい系でカラフルな色にこだわった「My Color」、スポーティやカジュアルなイメージでデニムと組み合わせた「チェニム」(チェック×デニム)をテーマに決めた。その後、それぞれのテーマに沿った服をデザインし、東条湖おもちゃ王国の協力でタカラトミーのリカちゃん人形用の服に仕上げ、各ブランドのイメージマップを立体的に表現した。テーマに添った播州織を提案するとともに、その播州織を用いてNSHブランド製品の製作に取り組んだ。



リカちゃんイメージマップ



生活情報科ホームページ

エ 情報発信

外部講師授業では、情報発信をする際に様々な状況を想定し、ターゲットや目的を考え、キーワードを設定するなど、配慮や工夫が必要であることが理解できた。今後、ターゲットや目的を明確にしながらか、継続して情報発信ができるように、指導や組織の工夫を考えていきたい。

(3)「実践力」の習得

ア 海外に向けたものづくり—NSHブランドの発信—

様々な研修を通して学んできた日本人としての感性を活かすとともに、播州織の最先端技術や特徴を取り入れ、素材・色・組織・加工等を産元商社と連携して企画デザインを行い、新しい播州織製品を提

案し、布地からアパレル商品までを自分たちでデザインした「NSHブランド」の発信に取り組んだ。

① 国際フロンティア産業メッセ2016 にて展示 (ベスト展示賞 受賞)

神戸国際展示場で行われた西日本最大の総合見本市に出展。来場者に積極的に声掛けをし、播州織を通じた地域活動の取組の説明を行うことで、自信や誇りを感じることができた。また、2日目に行われたプレゼンテーションも多くの方に情報発信することができた。



国際フロンティア産業メッセ2016

<生徒感想>

・「なんで高校生が？」と少し批判的な言い方をされる方もおりましたが、自分たちの活動を説明していくことで理解し興味をもってもらえることができました。そして自分たちが行っている活動は、多くの会社の方からも興味を持ってもらえることだと実感し、自信を持つことができました。

・「衣装は販売しているの？」と質問があり、販売してみたいと思いました。

・言葉遣いだけでなく、伝え方やコミュニケーションのとり方、臨機応変に対応すること、質問に対して的確に答えるための情報量など、改めて大切だと思いました。

② パリ研修での作品展示

上田女子服飾専門学校との協力で、リボンメーカー「SHINDO」のショールーム (パリ2区中心街) にて、播州織作品の展示を行い、本校の取組を発信した。



<生徒感想>

・パリでも、こんな高級地区のショールームで展示ができたことは、本当にすごいことだと思った。

・多くの方が播州織に興味を示してくださったことにとっても驚いたし、播州織ってすごいと、改めて思いました。

・現地の方に「すばらしい。日本の高校生がこのような活動を行っているということをもっと広めていくべきだ。」と言っていただき、自信を持つことができました。

・来ていただいた方は、現地高校生の日本語の講師、デザイナー、区役所の方など、これからの活動に繋がる手がかりを見つけることもできたと、アドバイスもたくさんいただくことができました。



パリ研修

イ SNSの活用

常に新しい情報発信を行うための体制づくり等に計画的に取り組み、「西脇高校のホームページ」等からの情報発信の充実を図る。



Homepage



Facebook



Instagram

ウ 地域のコミュニティづくり

① 「TUMAこいカフェプロジェクト」

店の暖簾や座布団カバー、スタッフのエプロン等を製作するほか、イベントの共催や運営の補助をすることにより、播州織を通して高齢者が活躍できる場所づくりとコミュニティづくりの拠点を考える。

<生徒感想>

・司会進行を行っている時、伝わりにくかったり、敬語が話せなかったり、うまくできませんでした。正しい敬語や伝えたいことが言葉として出てくるように、もっと新聞や本を読まないといけないと思いました。

・高齢者との交流は、入学した当初苦手でしたが、何回か交流しているうちに、楽しいと思えるようになりました。特に今回のように、ゆっくりお話をするときは、昔話をしてくださったり、ニコニコ楽しそうに思い出を話してくださいます。たまに同じことを何度も何度も聞いてこられたり、話されたりしますが、何回話しても笑顔で、何度も聞くこちらまで笑顔になれるので楽しいです。



TUMAこいカフェ

・認知症の方とたくさんお話をしました。同じ話をしているようでも、実は少し話が変わっていたり、前に話している内容をさらに広げたものだったりしました。交流会が終わってから、「よく耐えとったなあ。大変じゃなかったの？」と言われましたが、私は全然そんなことは思いませんでした。むしろ話の内容がよく分かって、自分からも話しかけやすかったです。対応の仕方など学ぶことがたくさんあったいい交流会でした。

②「親子ソーイング教室」と「僕も私もデザイナー」

世代を越えたものづくりの提案や、デザインした服を実際に子供たちと高校生と一緒に製作しファッションショーで披露することで、播州織の普及を考えた。

<参加者の感想>

- ・材料をもらった時は「もうここまで仕上げているの!」と思いましたが、まだ不慣れな子供が短時間に完成させるためにはありがたい配慮でした。企画・準備から後片付けまで大変お世話になりありがとうございました。可愛くて優しいお姉さんに教えてもらいながらのソーイング教室はとても楽しかったようで「お母さんのエプロンも私がやるわ」と娘が縫いました。少し歪んだ縫い目のお揃いのエプロン、大切にします。(母)
- ・年の離れたお姉さんに、優しく教えてもらえたので、いつもより集中してできていました。完全に子供をお任せできたので、違う一面を見ることができました。(母)
- ・はじめてミシンをつかってとてもたのしかったです。毎日つくったエプロンをつかっています。高校生のおねえちゃんにおしえてもらってわかりやすかったです。家にミシンがないのでミシンがほしいなと思いました。(5歳児)



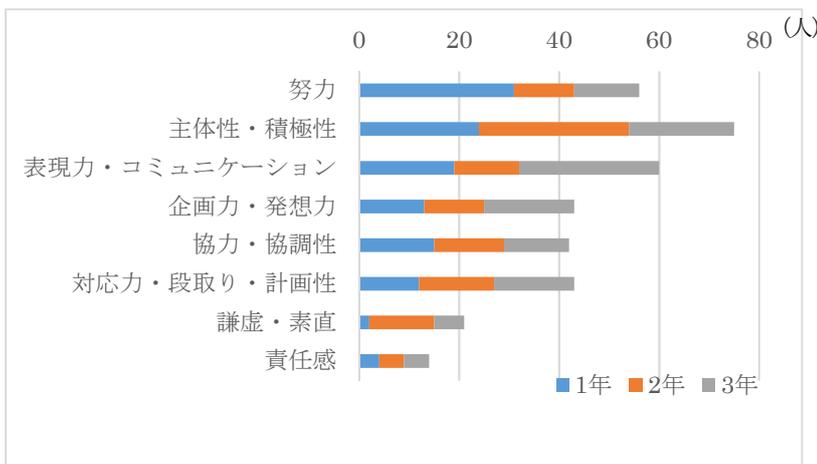
僕も私もデザイナー

3 成果と今後の課題

(1) 研究成果

ア 授業や行事等の実践に対する生徒の変容 (1年40名、2年38名、3年40名の自由記述から)

SPH事業を通して、自分に身についたと思うものを3つ挙げ、どのような場面で身に付いたかを書きなさい。



<1年生の分析>

- ・努力の大切さ、努力を怠らない、努力した分強くなれる、練習し続けることなど努力することを学んだとする生徒が最も多い。
 - ・情報でのブラインドタッチや被服の基礎縫いなど技術の習得が多い。
 - ・自分で考える、先のことを考えて行動する、先を見通して行う、周りを見て行動するなど、主体的に考えることを学んでいる。
- <生徒感想例>中学校までは、言われたことだけを忠実にして満足していた。高校ではそれではだめだと気づかされた。

<2年生の分析>

- ・主体的に積極的に取り組もうとしている。何事にも挑戦すること、興味を持って取り組む、チャレンジしていく大切さ、積極的に課題に取り組む、などいろいろな場面で主体的に考え取り組むことを意識している。
 - ・2年生では、調理実習やグループ学習において、協力することや協調性を学んだとしている生徒が多い。
- <生徒感想例>多い宿題にも楽しそうに取り組む仲間を見て、積極的な態度で取り組むことができるようになった。

<3年生>

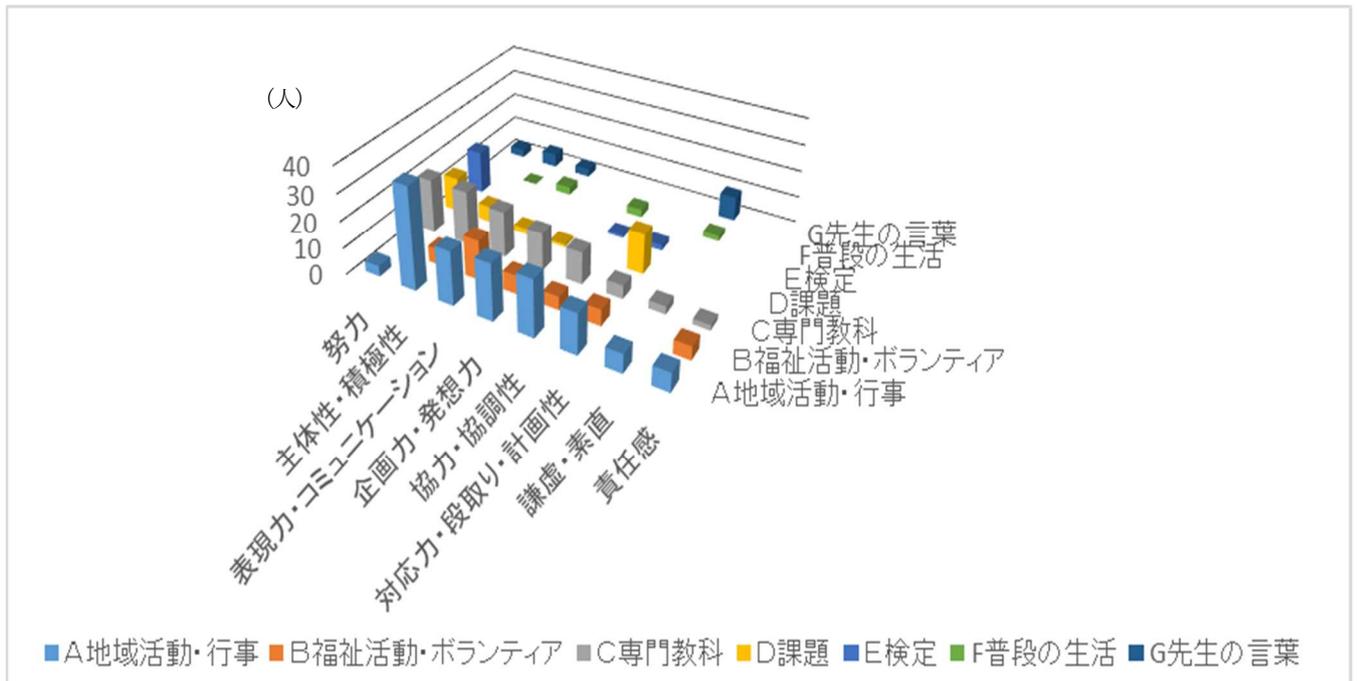
- ・課題研究での福祉活動やイベントが増え、コミュニケーション能力を挙げている生徒が多い。
 - ・様々なプロジェクトやイベントを主体的に実施することで、企画力や発想力、対応力や段取り力などが身についている。
- <生徒感想例>教えてもらったことをどれだけ自分のものにするか、指示されたことをどれだけ受けとめるか、頼まれたことをどれだけ快く引き受けるか、それは全て謙虚さが大切だと思いました。そして頼られる信頼される人間になっていくと感じました。

イ ファクター分析

多くの生徒が地域活動や行事、専門教科の学習を通して様々な力を身に付けることができたと感じている。地域活動や行事への参加を通して得たものとして主体性や積極性、協調性に加え、企画力や発想力を挙げる生徒が多いことは、3年間のSPH事業の取組の成果である。さらに、専門教科の学習を通して、積極性や主体性が高まり、その結果、知識や技術力、技能の向上を図ることができたことは、家庭に関する学科としての基本的な目的が達成できているものと言える。

平素より専門的職業人に求められる企画力や調整力の向上を目指して、様々なイベントや行事を生徒に計画の段階から担当させてきた。主体性や自主性については平素の授業や実習等の時間を通して身に付けさせた。全ての生徒に個々の状況に応じた難関を設定し、適度な課題を与えることを意識しながら指導にあたった。このような日々の活動が生徒の様々な力の向上につながったと思われる。

それぞれの教育活動を行う際に、生徒にどのような力を付けさせたいか、指導に当たる教員が目標を明確にしたうえで共有し指導していくことが必要である。専門的職業人として求められる多くの資質を身に付けさせるうえで、留意すべき点である。



ウ 家庭に関する学科の在り方

①専門教科指導 アンケートの結果から、教科指導の在り方をまとめた。

全面制御学習 → 有意味受容学習 → 誘導発見学習 → 独り立ち学習

1年	2年	3年	目標と留意点
ファッション造形基礎 生活産業情報 日本の文化と地域産業 家庭基礎	ファッション造形 フードデザイン グラフィックデザイン 家庭情報応用 選・リビングデザイン	生活産業とマーケティング 課題研究 選・キルト	基礎・基本を一層重視し、専門分野に関する基礎的・基本的な知識、技術及び技能の定着を図るとともに、ものづくりなどの体験的学習を通して実践力を育成する。
基礎基本の充実 努力 計画性 考える	思考力・発想力の充実	主体的な実践活動 コミュニケーション能力 その他	基礎基本の技術の習得：正しい方法で確実な技術指導 出来るまで繰り返しやり直す 成功体験：やってよかった・できて満足する内容 目に見える形にする：発表する 展示する 努力する姿勢
			考えさせる：思考錯誤しながら取り組む姿勢 課題の工夫 表現力 グループ学習を取り入れる：個人レポート→グループ討議→ 1つにまとめる→個人レポートで学習の確認→ 評価 外部講師授業によりレベルアップを目指す
			プロジェクトチームで活動する：リーダーを作る 全ての企画を任せる：企画目標をしっかりと理解させる 地域活動へ展開する：デザイン思考により企画し実践する

②地域行事・地域交流

- ・西脇市との連携
西脇市ファッション都市構想の企画にできるだけ参加していく。
播州織ファッションショーやイベントなど連携体制を密にしていく。
姉妹都市レントンとの交流を図り、グローバルな視点での取組の機会とする。
- ・播州織産業界との連携
地域に学び、高度な技術と職人の思いを知り、地元の誇りと愛着を育てる。
高校生の発想でオリジナル播州織の企画、提案の機会をシステム化する。
- ・卒業生との連携
地域で活躍している卒業生と連携し、地場産業「播州織」の専門的な学習が継続して行えるシステムを構築する。



*目標を明確にして取り組む
→デザイン思考で考えさせる。

*依頼に対して、できる方法を考え臨機応変に対応する。
→範囲や内容を工夫する。
→生徒が直接対応し、主体的に企画、計画、実践する。

(2) まとめと今後の課題

3年間のSPH研究指定を受け、スペシャリストを育成するための目標を設定し取り組んできた。多くの方々に指導していただき、1年目は「基礎力」、2年目は「思考力」、3年目は「実践力」と段階的に積み上げ、様々な活動や学習内容等を検討し実践してきた。また、工場見学やインターシップなど地域産業と連携した研修や高校生の発想でNSHブランドを発表したり、播州織を活用したワークショップや交流会を企画し、コミュニティづくりを実践したりするといった取組の中で、生徒は地域に支えられていることへの感謝と、地元への誇りや愛着を持つことができた。

様々な実践活動では、デザイン思考を取り入れ、問題点や課題を把握し、企画、実践していった。ただ単にものづくりを行うのではなく、その目的や過程を意識しながら、グループで取り組むことが重要である。各自が自分の考えやアイデアを持ちそれぞれの情報を共有し1つにまとめていく。その過程で生徒は発想力や企画力、実践方法などを身に付けた。

また、播州織産地に学ぶことに加えて、グローバルな視点で播州織のすばらしさと高校生の感性を海外へ発信しようと、展示会や産業教育フェア、ホームページ等において英語でのプレゼンテーションを試みた。この取組を通して、地域連携や播州織のすばらしさを英語で表現していく難しさを感じるとともに、自分たちの活動や思いを再確認することができ、さらに意欲的に海外発信を考えるようになった。パリ研修では、海外の文化や自然に触れることで、改めて日本の美意識や感性を感じ、つまみ細工等の日本の伝統技術や日本文化の良さを見直すことができた。パリ研修の2年目には、パリで播州織作品の展示会を行い、オリジナルの播州織作品や会場での高校生の対応に感動と共感を得るとともに、日本文化のすばらしさを改めて認識し、自分たちの活動に誇りと自信を持った。

3年間のSPHの取組において、生徒はそれぞれが自分の力を精一杯発揮し、明るく生き生きと取り組んできた。個々が自立し主体的に取り組みながらも、チームワークをもって一つのものを作り上げてきた。これらの取組を通して得ることができたリーダーシップや責任感、こだわりをもちながらも協力していく力は、スペシャリストとして必要な資質である。また、専門教科の学習で知識・技能を習得させるだけでなく、実践的・体験的な活動を通して、その根底にある理論を理解させるとともに、生活産業に従事するスペシャリストとして、望ましい勤労観や職業観をもたせ、生涯にわたって学ぶ意欲を身に付けさせることも重要である。本年度は、従前より行っている資格取得や技術検定に加え、全国レベルのコンテストや大会に挑戦させるなど、目標を持った意欲的な学習をとおして課題を探究し、自ら考え行動し解決する力、適応していく力を身に付けさせるとともに、コミュニケーション能力や協調性、積極性、創造性に加え、職業人として必要な人間性や規範意識、倫理観等の育成についても念頭に置き指導した。

SPH研究指定で取り組むことができた内容を、今後、いかに継続させていくかが課題である。手法や内容が変わっても本質的なものは普遍的に指導が続けられることが必要である。このため、教師には発想力と柔軟な対応力が試されるが、本校の場合は、地域産業や地域社会との連携・交流を通じた実践的教育とそのための工夫がさらに必要と感じている。また新たなプロジェクトが始まる思いである。

1. 事業の概要

本研究では、基礎的・基本的な技術・技能の習得に加え、高度かつ応用的な知識や技術に触れさせ刺激を与えていくことで、これまで以上に福祉や介護への強い情熱と高い誇りを有し、同時に自らの知識・技術・技能に自信を持って地域福祉に貢献できるケアワーカーを育成することを目的としている。ソリューションフォーカスとは、「課題解決志向」ともいわれ、原因分析にこだわりすぎず、ニーズに対して肯定的な未来イメージを持ち、実行可能な具体的解決行動を先行させる思考法ないしはコミュニケーション手法のことである。

ソリューションフォーカスの視点に立ち、介護サービス利用者（以下、利用者という）の課題を的確に判断しながら、利用者の生活をより良くする「利用者本位の介護」を生徒が主体的に考え、困難な課題にも協働して解決できる能力を養うために「気づく⇒考える⇒解決策⇒実施」させる取組を行ってきた。

2. 具体的・特徴的な実践内容

(1) ソリューションフォーカスの視点に立つケアワーカーの育成方法の研究

「利用者本位」の考え方を獲得し、介護の技術や技能に自信を持った人材を育成するためには、介護の技術に関連した「コミュニケーション技術」「生活支援技術」「介護過程」の3科目を連動させ基礎・基本を学び、「介護実習」で応用する力を付けさせる必要があると考えた。重要となる利用者を観察する視点を獲得させるための教材や指導法、評価法を開発し、生徒に基本技法・分析技法・専門技法の3つを習得させていった。

1つ目の基本技法は、見たり聞いたり話したりする中で相手の立場を理解できるように『感性』を豊かにする。そのためには、観察や傾聴、自己の考えを表現する技術を磨き、利用者から必要な情報を収集して的確に記録・整理し、利用者が今をどのような気持ちで暮らしているのかを考えさせることができるように指導していく。これは利用者のこころとからだの痛みを知るきっかけにもなる。

2つ目の分析技法は、基本技法で集めた情報から、その人の思いや考え方の傾向を見つけ出し、利用者にとって何が課題となっているのかを分析し、把握する。利用者の課題を的確に見つけ出すためには、介護全般における基本的な知識・技術の習得が必要になってくる。

3つ目の専門技法は、分析技法で見つけ出した課題に対する介護計画（目標や支援内容、方法）を作成し、実施、評価する。介護実習で基本技法・分析技法の学びを繰り返し行い、ICFの観察法や24時間生活シートを用いて利用者の生活課題が可視化され、生活課題の改善や解決の糸口が見えてくる。

さらに、基本技法、分析技法、専門技法をより効果的なものにするために、兵庫県立教育研修所と連携し、自宅でもパソコンやスマートフォンから介護技術動画が閲覧できるシステムの活用や、本校の電気情報システム科との連携によるICTを活用した授業研究も実施している。授業では、生徒は介護の動画をタブレットに保存し、自分たちが行っている介護方法や声かけの方法を分析し、他の生徒と情報を共有でき、振り返ることができる。また、自宅でも、動画を活用して予習・復習を自主的に繰り返し行うことができる。



(2) ピアスーパービジョンにより、自主性・主体性を育てる方法の研究

外部の異年齢、障害のある方など多様な方々との交流を通して、言葉遣いや表現方法、表情など、相手に合わせた円滑なコミュニケーション能力を身につけることができる。また、これらの行事を

生徒たちが協働・連携して企画・運営することで、生徒の自主性、主体性や自己有用感や自己肯定感を育むことができる。このように「チーム」「協働」「コミュニケーション」に焦点を当て、総合福祉科の数々の行事を、生徒たちの企画・運営により実施している。



①学校デイサービス

文部科学省の「目指せスペシャリスト事業」で指定を受けた12年前から継続して実施している学校デイサービスは、総合福祉科全学年が参加する行事で、3年生が3年間の学びの集大成として企画・運営を全て行っている。各パートリーダーやその他の盛り上げる役割など、生徒それぞれが役割を持つことで、生徒は自ら進んで物事に取り組んでいく。

②介護教室

小中学生・高齢者文化大学との介護教室は、総合福祉科2年生が担当している。ここでは、他人に自分たちの学びや思いをわかりやすく伝える難しさを体感する。全体の総括リーダーが中心となり、介護教室に参加する

小中学生の人数は担当する2年生とほぼ同数、高齢者文化大学生に関しては担当の2年生1人が高齢者2、3人を担当して介護を教える。全員が役割を持ち、どうすれば内容がうまく伝わり、参加者に喜んで頂けるかを話し合い、「教える知識と技術をクラス全員で標準化すること」を目標に取り組む。

③特別支援学校との共同学習

特別支援学校との共同学習は、特別支援学校の生徒と卒業後に共に介護現場で働くことを想定して3年生が取り組んでいる。2年次に特別支援学校へ見学実習に行き、生活の様子を知り、障害への理解を図る。3年次には、マナーやベッドメイキング等の実技指導を、生徒が企画・運営し、共に学ぶ。生徒は、相手を理解して共に学ぶ楽しさと物事をわかりやすく伝える難しさを体感している。この活動を通じて、障害のある人に対する教育や支援に興味を持ち、進路を決定した生徒もいる。

④ウエルフェア・コレクション（障害者ファッションショー）

Welfare-Collection（障害者ファッションショー）は、3年生が本校の他学科と連携して実施している。リハビリテーションセンターの利用者と交流し、利用者の思いやニーズを捉え、衣装や小物のアイデアを考えていく。当初は先輩の真似や先生の指示で動くなど、自分たちで作り上げようという意識や自主性が見られなかった。しかし、利用者や外部の方々と衣装制作の打ち合わせを重ねるうちに、自主的な言動や意見交換の機会が増え、ショーの実施後には生徒主体の反省会を行ない各役割の反省点と改善点を出し合うことで、次のショーの成功に向けて内容を改善していく様子も見られた。

総合福祉科の各行事では、本校の他学科との連携をはじめ、兵庫県、たつの市、社会福祉施設、社会福祉協議会等の官民との連携協力を深化させている。

(3) 介護の質を高める医療的ケアのための「生活支援技術」指導法の研究

法改正に伴って介護福祉士が「痰の吸引と経管栄養」（以下、医療的ケアという）を一定条件でできるようになった。本校でも2013年度から医療的ケアの学習をスタートさせている。命に関わるケアのため、より専門的な知識と技術が必要であるが、介護福祉士を目指す高校生への医療的ケアの効果的な指導法はないため、指導法のマニュアル作成を行った。

授業の中で前時の復習と知識の定着、生徒の理解度把握のために小テストを行い、間違った項目について自己学習する学習ノートを作成し知識を定着させる。また、技術の定着のために、手技の確認だけでなく、身だしなみ、声かけ、安全の配慮等の項目を加えるなど、チェックシート（実技評価シート）の改良を重ね、生徒同士でもチェックシートを用いて評価できるようにすることで、生徒が練習を自主的に重ねられるようにした。生徒たちは、演習項目の技術習得を目指すだけではなく、喀痰吸引や経管栄養を行うにあたって、利用者に対してどのように支援することが最適であるのかを考え、仲間とともに切磋琢磨し、取り組むことができた。

また、アクティブラーニングの手法を取り入れ、講義と実技の関連化を図った。実技を行うために、座学部分から関連させ



た内容でアクティブラーニングの手法を取り入れた授業を展開し、生徒の学習意欲や理解等の向上につながった。授業後にはアンケートを実施し、生徒の理解度を把握するとともに授業の組み立てを考え直して、指導法のマニュアル化を図った。

これらの取組により、知識や技術の指導だけにとどまらず、支援の中で個人の尊厳や利用者心理を理解させ、福祉の理念を十分踏まえた授業を行えるようになった。

(4) 高度な介護技術を習得させるための指導法の研究

3年間という短期間で生徒により大きな刺激を与え、福祉や介護への興味関心を高めさせ、より意欲的な態度を育てるために、上記(1)～(3)における基礎的、基本的な介護の技術獲得に加え、高度で応用的な介護の技術に触れさせる。

① 「楽ワザ」介護技術研修

利用者の思いを尊重し、持っている力をうまく使ってサポートする技術である「楽ワザ」介護の講義や実習は、自分のやりたいことを諦めていた利用者に、やりたいことを叶えてもらう内容であった。利用者が元気になられた取り組みから、生徒の技術習得への意欲が更に高まった。また、生徒たちは「楽ワザ」介護技術を基本にして、体格差などによって方法を工夫することでより楽に介護ができるオリジナルの技術を生み出し、その方法に「龍北カイゴ」と名付けて練習を繰り返している。これは、利用者の状態や体格差に対応した介護技術であるため、卒業後も介護現場でよりよい介護方法を探求し続ける介護福祉士になることが期待できる。また、小中学生や高齢者への介護教室や文化祭でもこの「龍北カイゴ」を取り入れ技術を伝えることで、生徒は、介護の知識や技術を伝えるためには自分たち自身が十分に理解し、技術を習得しておく必要があることがわかり、練習を重ねることでクラス全員の技術の習得につながった。



②介護コンテスト

兵庫県内の福祉を学ぶ高校生が、介護の技術を競う大会である介護コンテストは、生徒同士が切磋琢磨し、介護の技術とコミュニケーション技術を磨き、高め合うことができる。介護コンテストに参加するために生徒たちは、タブレットを活用して、互いの介護を何度も振り返りながら、支援方法やコミュニケーション技術を確認した。介護者として主体的かつ協働的に質の高い介護を目指し議論し合うことで、仲間同士の絆も深まった。大会当日は生徒は他校の介護技術を客観的に見ることで刺激を受け、その方法を自分たちの介護に応用して、更に介護の技術を向上させたいという意欲も湧いていた。介護コンテストは、本校だけでなく兵庫県で福祉を学ぶ高校生の介護への興味、関心を高めるだけでなく、介護の技術の底上げにもつながっている。

③排泄介助研修会

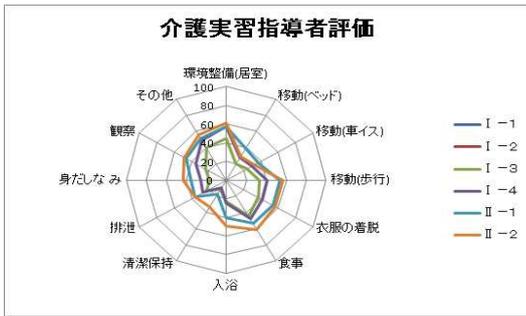
排泄介助の研修会では、オムツの性能や用途、利用者の状況、状態に合わせたオムツの選定方法や漏れを防ぐための方法などの専門的知識を、花王のメディカルケアサポートグループの方に実技を踏まえて教えて頂いた。オムツ交換における利用者の精神的負担を軽減させるため、より利用者本位の介護、寄り添う介護を考えた。排泄介助は利用者にとって羞恥心や自尊心に関わる非常にデリケートな介助であり、介護職にとっても負担の大きい介助だからこそ、利用者に安心して気持ちよく生活して頂くためにも、この研修は大変有意義である。

これらの高度な介護技術の習得は、より高いレベルを目指すことになり、生徒の興味・関心を高め、学習への意欲向上につながった。

3. 成果と今後の課題

(1) ソリューションフォーカスの視点に立つケアワーカーの育成方法の研究

生徒は、4つの科目を一体的に学びながら、介護過程で一番大切な利用者のアセスメントを行う

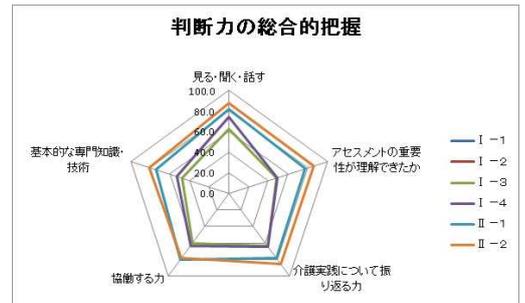


(グラフ 1)

をもって実習に臨むため、初めての施設であっても各実習生の介護の技術・技能の段階が分かり、指導がより充実したものとなった。

②判断力 (基礎力・思考力・実践力) 評価の活用

利用者本人をはじめ他職種の意見を積極的に聞き、多くの要望や考えを調節していく能力を評価するため、(ア)見る・聞く・話す、(イ)アセスメントの重要性が理解できたか、(ウ)介護実践について振り返る力、(エ)協働する力、(オ)基本的な専門知識・技術の5つの観点で生徒の判断力 (基礎力・思考力・実践力) を総合的に評価した。(グラフ 2)



(グラフ 2)

③形成的評価の活用

「コミュニケーション技術」・「生活支援技術」・「介護過程」の3科目を連動した「課題研究」の中で、利用者のアセスメントや介護計画立案をグループごとに行い、各グループに担当教員が付いて、「形成的評価」をしながら段階的に指導を行い、クラス全員が的確な介護過程を展開できるように「ケアの標準化」を行った。

④成果と課題

これらの3つの評価から生徒の成長が目に見える形で実感できた。また、習得した能力を評価するための観点をまとめて「見える化」を図り、生徒、教員、実習指導者全員で共通理解ができるようにしたことにより、生徒の状況把握や生徒自身の自己評価がより簡単に、客観的にできるようになった。

今後は、利用者本位の介護とその根拠にとどまらず、説明責任やリスクマネジメントの学びを加え「介護の技術」の自信や「介護のこころ」をさらに成長させ、「人の心を動かす」介護福祉士を育てていきたい。

また、Web ページでの介護技術動画の常時閲覧については、自主学习による技術習得や意識向上の効果が高いことから、さらに事前・事後学習を活発化させるとともに、他校や福祉施設とも共有したいと考えている。

(2) ピアスーパービジョンにより自主性・主体性を育てる方法の研究



各行事への取組状況を見ると、課題であった準備段階における生徒同士のコミュニケーションや協力・協働が活発にみられるようになった。生徒は、与えられた役割を実行するだけでなく、自分たちで作り出していく取組を目指す行動が見られ、リーダーはリーダーとしての自覚が生まれ、他の生徒もフォロワーシップを発揮し、積極的に自分たちで話し合い、協力し合う姿が明らかに増えるなど、自主性・主体性が育っている。行事後の振り返りにおいても全体の成功に対する喜び、そこに貢献できた喜びや満足感が現れることが多くなり、自分自身の変化、

成長を実感できる取組となっているように感じる。その他にも、臨機応変に対応する力、課題解決やサポートする力、異年齢交流で得たコミュニケーション能力や、参加者からの感謝や喜びの言葉がけによって達成感や社会的有用感を感じる事ができた。

しかし、現在は限られたメンバーがリーダーで活躍しているため、クラス全員がリーダーになれる資質を育てることで、将来の福祉の現場でのリーダーとなれる生徒を育てていきたいと考える。そして、自分の役割を一人ひとりが理解し、チーム全体で協力・協働できるように指導していきたい。

(3) 介護の質を高める医療的ケアのための「生活支援技術」指導法の研究

生徒のアンケートや実習記録、小テスト等により、生徒の理解度や教授の成果が明確となり、それらを踏まえた上で次の授業に取り組むことができた。また、小テスト実施後の学習ノート作成により、前年度と比較しても、全体的に平均点が上昇するなど、知識の定着と意欲の向上が見られた。更に、アクティブラーニング手法を活用した授業により、知識・技術だけでなく、利用者に対する配慮や様々な気づきも一層できるようになり、多大な成果が見られた。



今後は、更に教材に指導上の留意点・ポイントなどの改善・工夫点等を盛り込み、より教授しやすい教材にして全国に広めていきたい。また、指導マニュアル作成により個人の尊厳や寄り添う介護等を十分踏まえた医療的ケアの授業が行えるようにしたい。

(4) 高度な介護技術を習得させるための指導法の研究



利用者の持てる力を活用して介護する「楽ワザ介護」技術の研修を通じて、生徒同士が互いに切磋琢磨しながら放課後や長期休業中に自主的に練習に取り組むなど、生徒はさらに福祉・介護に興味・関心を強く持ち、技術を習得しようと意欲的に取り組むようになった。また、教員にとっても最新の介護の技術を習得でき、授業で生徒の理解度を形成的評価しながら、介護に対する考え方や技術の定着に努めることができた。生徒が利用者に応じて元気にする「龍北カイゴ」を検討、開発したことで、高い技術と自信、誇りを持って社会に羽ばたけると考える。

今後は、福祉を学ぶ県内の高校生にも本校のHPやWeb授業等を通して、同じ技術を学ぶ機会を提供することで、県内の介護を学ぶ高校生のケアの標準化が実現できればよいと考えている。そうすることで、高校で学んだ介護の知識と技術が現場に伝播され、兵庫県全体の介護の統一化につながると考える。

介護コンテストを通じた取組では、生徒同士が切磋琢磨し競い合いながら、介護の技術力、コミュニケーション力の向上が見られた。クラスメイトも実技の練習や利用者役にアドバイザーとして参加しており、仲間同士の絆も深まっている。

しかし、年々出場希望者は増えてはいるものの、クラス全員の介護力や意識の向上にはつながっていないため、クラス全員に広がるよう工夫していく必要がある。

排泄介助研修会（オムツ交換介助）は、介護実習で現場の排泄介助の現状を見てきており、自分たちなりに排泄介助を良くしたいという思いもあり、非常に関心が高く有意義な研修会となった。今後は、現場で必要となる「オムツ外し」のための知識・技術についても高度な介護の技術と関連させながら回数を重ね、より専門的な知識・技術の習得につなげていきたい。



今後は、最新の介護技術や福祉機器の見学、新しい取組を行う介護福祉施設等の見学を実施し、さらに生徒の知見を広め、福祉や介護への興味関心を高めていきたい。そして、感受性の豊かな高校生の時にしっかりと「利用者本位の介護」を考える機会を与え、今の福祉の現状をより良くする方法を考え続ける、探究心の強い介護福祉士を育てていきたい。

ソリューションフォーカスの視点に立つ

スーパー・プロフェッショナル・ケアワーカーの育成



自信体得

指導法の研究

生活支援技術の再構築

人材育成

介護技術・技能

の向上

<支援技術>

介護過程など

- ・介護技能コンクール
- ・AJCC見学研修



<応用技術>

入浴、排泄、移動など

- ・楽ワザ介護
- ・オムツ研修



<基本技術>

身体の動き、移動など

- ・楽ワザ介護

判断力

の向上

<専門技法>

実践

仮説・計画 ← 振り返り
・評価



<分析技法>

集める⇔分析する

↓
抽出する



<基本技法>

みる・きく・はなす
書く・読む

3年次

<実践力の向上>

- ・医療的ケア (痰の吸引) シミュレータの活用
- ・課題研究
- ・特別支援学校との共同学習
- ・タブレットの活用
- ・介護過程の実践

実践力

2年次

<基礎を充実>

- ・医療的ケア (経管栄養) シミュレータの活用
- ・介護教室
- ・共同開発 (CHARM Pad) (DANCE SYSTEM)
- ・ICFの視点

思考力

1年次

<心構えの体得>

- ・生活の理解
- ・たつの荘との交流
- ・デイサービス
- ・実習報告会
- ・見学実習
- ・特別非常勤講師活用講座

基礎力

<授業>

- ・生活支援技術 (1~3年)
- ・介護総合演習 (1~3年)
- ・介護過程 (1~2年)
- ・コミュニケーション技術 (2年)

<実習>

- ・介護実習Ⅰ (1年次 140時間)
- ・介護実習Ⅱ (3年次 175時間)

<事業>

- ・水無月のつどい (1~3年)
- ・西播磨総合リハビリテーションカ-見学実習 (1年)
- ・西はりまリハビリテーションカ-見学実習 (2年)
- ・Welfare-Collection (3年)

3J (授業・実習・事業) の充実